

---

# 憂鬱な魔術師

大河内一滴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

憂鬱な魔術師

### 【Nコード】

N97350

### 【作者名】

大河内一滴

### 【あらすじ】

魔法が全てを支配する世界。そこでは強い魔術師が重宝され、魔法が使えることが第一とされる国があった。そんな国の学校に通う主人公、しかし主人公は学校で最下位になるくらい魔法を使うことが苦手だった……ある呪われた魔法を覗いては。

## 1・憂鬱な主人公は今日も本を読む

「またかよ」

「ああ、またあいつが一番だ」

後ろから隠す気のない会話が聞こえる。

そこには怒りや嫉妬、羨望の感情の感情などはなくちょっとしたユーモアがあるかのようなひねくれた笑いとなって残る無関心だけだった。

ここはクラリエット王立高等学校。一般教養から魔法教養まで全ての学問・実技の総合教育を行う普通科の高校の中ではトップクラスの学校である。なんたって王立だ。

学校内の2年生のクラスがある階の廊下、今そこでは昨日まで実施されていた学年末学問テストの結果が貼り出されていた。つまり学問成績の順位だ。そして俺は貼り出された成績の前で自分の成績を確認しようとする生徒達の中1人立っている。

1位      グウエン・イルス

イルス      それが俺の名前だ。

ちなみに貼り出された結果には成績のほかに誰がどの教科で何点とったかまでもが書き出されている。しかしイルスはそれには気にも留めず教室の中に入った。他の生徒も自分の順位がどれくらいかをチラツとは見るものの、その他の具体的な成績について気にする人はいないし、順位すらも気にしない生徒が多い。

それはこの結果が「学問」の結果だからだ。

「またイルス君が1位だったってー」

「へえーどうでもいいー」

「学問で1位とったってあれじゃあねー」

「そんなこと言っちゃ可哀相だようー」

教室の中では女子達が笑いながら喋っている。会話の中身はイルスのことみたいだが、いつものことなので気にせず自分の席に座る。席に座ったイルスを先ほどの女子達は遠慮なくジロジロ見ながら小声で喋り笑いあう。いい加減鬱陶しいが何もできないのしょうがなくカバンから本を取り出す。その間も無関心を伴った視線はこちらを外れることはない。

「よお、イルス。またテスト1位だったみたいだなー」

読んでいた本から視線を外し前を見ると、同じクラスの男子がニタニタ下品な表情を浮かべながらイルスの前に立つ。

「いやいや、さすが常日頃勉強をされてる方は成績がよろしくて羨ましい限りですよ」

直接的な嘲りがこめられた皮肉に多少なりとも怒りがこみ上げて

くるが、相手にしてもきりが無い。せめてもの反抗として無視して本を読むことにした。

しかし本に視線を移すと男子に本を取り上げられた。

「ちつ無視すんなよ。まあいいや、学問ができるのは分かったから俺としては魔術も上達してほしいわけ。今月お前は俺の班なんだから、分かるだろ？」

そういつて手に持った本を見る。

たちまち手に触れてる部分から煙が出始め、こげた匂いが生じる。

イルスは何も答えない

「……だからさあ、せめて俺たちの足元を照らすくらいの火くらい無詠唱で作出せるようになれよ。分かったな？」

そう言い放つと本を床に放り投げ他の男子の輪の中へ戻っていく。本を拾うと表紙には黒く手形が残っていた。うんざりしつつまた座って本を読む。

そう、「魔法」が普遍のものとなっているこの世界で「学問」で1位をとっても何の意味も無いのだ。

確かに学問は大切だ。一般的な教養が無ければ普通の生活は送れないし、魔術理論を知らなければ魔法を使うこともできない。

しかし、どんなに学問を勉強して、あらゆる魔術理論の知識を網羅しても「魔法」が使えなければそれらは塵に等しい。

新しい魔術理論を発明しても、その魔法を使えなければその発明は自分のものにならないし、どれだけ魔法戦術を極めたとしても魔

法が使えない指揮官には誰もついてこない。魔法を使えない魔術理論の先生なんて1人もいない。

このクラリエット国では魔法を使えることを第一と考え、全ての生活、法律、政治、軍事を魔法を基盤として築き上げている。

だから魔法の知識があることよりも魔法を上手に使えることが重視され、必然的にこの学校では魔法の「学問」よりも「実技」の成績が重んじられる。

だれもが自分の学問の順位を気にしないのも当然だし、イルスの学問の成績が1番なことにも、イルスに対してさえも無関心なのも当然だ。

イルスの「実技」の成績は毎回最下位なのだから。

## 2・長ったらしい説明は雲を掴むような話（前書き）

ほぼ説明のみなのですがあんまり読む必要はありません  
後半に要約したものがありますのでそれだけ読んでも多分大丈夫で  
す。

## 2・長つたらしい説明は雲を掴むような話

魔法を使うには2種類の方法がある（正確には3種類だが）

まず1つは魔方陣や呪文などによる構成魔法。

これは単純に魔方陣を書いたり呪文を唱えることによって、魔法を使うための構成式を築く。後はそこに魔力をこめれば構成式通りの魔法を使えるのだ。魔法を持っていれば誰だって使えるし、構成式を築くための魔法理論が必要になるが時間をかければどんな魔法でも使うことは可能だ。

魔方陣と呪文で区別する場合もあるが（それで魔法を使う方法は3種類だという人もいる）使う魔法理論は同じで、形で構築するか音で構築するかの違いしかないのでここでは一緒の方法として考える。

もう1つは魔方陣も呪文も使わない無詠唱魔法。

正確にいうと非構成魔法である。要は体内にある魔力を構成式を一切使わずに放出することだ。

聞いた感じだと魔方陣も呪文も一切使わないし、魔法理論を勉強する必要もないから簡単そうに思えるが、こちらの手段のほうに構成魔法よりも何倍も難しい。

まず、魔力を構成式を介さず放出することが難しい。

魔力とは言い換えれば第2の体力のようなもので、使えば疲労がたまるし、極限まで使えば倒れ、死に至ることもある。だから普通は体力のように体を動かしたり身体を強化するために使われるのだ（魔法理論が解明される前はもっぱら身体強化のために使われていたらしい）。手から魔力を放出しようとしても手に力が入るくらい



にしかない。

そこで出てくるのが思考式だ。

思考式とは簡単に言ってしまうえば頭の中で考える構成式のようなもののことだ。つまり頭の中で魔術理論を組み立て構成することによって、体内にある魔力を直接魔術に置き換え放出することができるのだ（だから非構成魔法のことを思考魔法ともいう）。

しかしこれだけなら魔術理論を勉強していれば思考式も使いこなせると思うかもしれない。だが残念ながら構成魔法の魔術理論では思考式を構築することはできないのだ。なぜなら思考式の魔術理論は個人によってまったく違うからだ。

なぜ思考式の魔術理論が個人によってバラバラなのかは未だ解明されていないが、1説によると個人の特質や特性、遺伝情報が違うから構成魔法の魔術理論では思考式を構築できず、個人で魔術理論がバラバラなのではないかといわれている。

さて、今特質という言葉が出てきたがこの特質というものが思考式では大きく関わってくる。

なぜなら基本的にこの特質によって人間の思考式は1つの属性にしか傾倒できないようになっていくからだ。

つまり、例えば火属性の無詠唱魔法を使うことができる人は他の属性の無詠唱魔法の使用は極端に苦手なのだ。使えないことはないが火属性に比べればまったくといっていいほど使えない。

属性には5大属性がありそれぞれ火、水、雷、風、金である。ほとんど全ての人間はこの5大属性のどれかに自分の思考式が当てはまり、自分の属性の無詠唱魔法を使うことができる。

今まで長々しく説明してきたがつまりは無詠唱魔法は1つの属性しか使いこなせねーよつということだ。

この国にとって魔法を使うことができるというのは「無詠唱魔法を使いこなすことができる」ということだ。実用的な話だが、ちまちま魔方陣を書いたり、長い呪文を唱えたりするより、頭の中で考えて魔法を使えるほうがよっぽど早くて便利に決まってるからしょうがない。

また軍事的な話で言えば、魔方陣や呪文は魔法を繰り出す前に見破られてしまうが、無詠唱魔法なら文字どおりくらうまで気づかない。

無詠唱魔法は難しいとは言ったがそれは理論の話で、実際にやってみると自分の属性魔法ならそこまで難しいことではない。大体の人間は幼いときになんらかの弾みで自分の魔法の特質を知り、自分が大属性のどの属性に当てはまるかを知り、あとはその特質にそった自分の思考式を構築していくだけだからだ。

しかし、何事にも例外というものはあるらしい。

例えばイルスは5大属性のどの属性にも当てはまらない。

だからイルスが無詠唱でどの属性の魔法を使おうとしても、炎は出ずに、手が熱くなるだけ。水は1滴もあふれず、汗がにじみ。雷

を目指しても電球に光を灯すこともできず。風は生じず砂鉄さえも  
生み出せない。

## 2・長ったらしい説明は雲を掴むような話（後書き）

説明するのってむずかしい。

一応おいおい詳しく説明していきます。

分からない部分があつたら教えてください。

### 3・実技につき苦勞

「じゃあ作戦を言うからみんな聞いてくれ」

控え室のロッカーの前で班のリーダー役の男は言う。

リーダーの提案した作戦に、各々が意見を挙げ自分の役割を作り上げていく。そんな中イルスは1人会話に混ざることなく革靴を脱ぎ、かなり汚れた実技用の靴に履き替える。

「おいイルス！聞いているのか！」

リーダーがイルスの方を向いて怒鳴りつけてくる。前日に本を焦がしただけではまだ足りなかったと判断したらしい。どうせ聞いたところでイルスに与える重要な役割も、イルスがこなせる作業もないくせに。

バカバカしい。

「聞いているよリーダー、俺は何をさせてもらえるんだい？」

その言葉にリーダーは怒りを隠すこともなくイルスの目の前まで来る。そして怒りを吐き出すようにひと息ついた後見下ろして言った。

「お前の役割はネズミ図だ。せいぜいフィールドの中を走り回ってろ」

そして元の位置に戻り何事もなかったかのように指示を続ける。

また今日も憂鬱な時間が始まる。

クラリエット王国は人口5万人ほどの大国家とは言わないが、決して小国家ではない中程度のある程度栄えている国だ。

そのクラリエット王国で一番偉いのは誰かと言われたら、それは当然のことながら現王様であるクラリエット王3世だろう。彼がちよつとでも気分を変えただけで民が重税で地獄の苦しみを受けたり、隣国全てを巻き込んで大戦争を引き起こすことができるのだ。

ではその次にこの国で影響力を持つ人物は誰なのか？

それは大臣でも国王補佐官でもましてや王妃様でもない。意外なことに、王様の次に影響力を持っている人物は王国軍のトップにいる。

つまり、この国の元帥だ。

クラリエット国は小ささまざまな国に囲まれている。そしてはつきり言ってしまうえば今現在クラリエット国は自国の近辺にあるどの国と戦争をしてもおかしくない状態にある。

例えば隣国で同規模の国力を有するフルール国とは3年前に休戦協定をしてはいるものの、その前は酷い戦争状態で、またいつその協定が破棄されるとも限らない。

また近隣にある聖ハーモニス国は大国ながらこの地方一帯を支配しようとしたたびちよっかいをかけてくる。

このような近隣諸国とのいざこざが絶えないため、王国では常に軍を強化していくほかない。

最近では魔物が活発に人を襲うようになってきているのも軍を増強させる原因になっている。

そんなわけで必然的に王国軍の影響力は強くなり、その軍のトップクラスの人間にもなれば数々の特権を与えられたりしている。隊長クラスになれば貴族以上の優雅な暮らしもできるらしい。

もちろんそのように様々な特権を与えられる王国軍はアイドル以上に人気で、我がクラリエット王立高等学校でも、卒業生の7割は軍に関連する仕事につくほど人気度抜群の進路である。

扉を開けて控え室からフィールドへ向かう。

フィールドは直径1キロもあるドーム型の建物で、魔法によりいろんな条件を作り出すことができる。今日は見たところ、森のようなステージになっていて気がうつそうと茂っている。

今回の実技訓練は毎週2回、3回行われる小隊訓練で7対7のバトル形式、先にリーダーを倒すか敵グループの誰かが持っているバツジを手に入れたほうの勝ちだ。

もちろん魔法使用可。

無詠唱魔法を使うことができないイルスにとってはハンデになる

どころか、まったく役にも立てない訓練だ。

「よし、じゃあみんな作戦通りに行くぞ」

そういつてリーダーの声とともにバラバラに散開する小隊。もちろんその言葉はイルスには向けられていない。役立たずはせいぜい囿ネズミのように動き回ることしかできない。

とりあえず適当に歩き回ろうと足を動かし始めたイルスの頭の中に、

ふと、

今日対戦する班のリーダーの顔が浮かんだ。

「ちっ」

怒りとも嫉妬ともいえないどす黒く忌々しい感情が自分の胸を支配しようとしていた。あわてて感情を押さえ込もうとしたが、舌打ちしか出てこずしばらくその場につつま立って怒りが通り過ぎるのを待つ。

頭の中に浮かんできた人物。

実技成績 1位

学問成績 2位

今日対戦する班のリーダーはイルスさえいなければ確実にどちら



でも学年1位を取れる。まさに最優秀生徒という言葉にふさわしい奴だった。

### 3・実技につき苦勞（後書き）

とりあえず氣力のつづく限りどんどん書き進めていきます。

#### 4・銀色の優等生と黒色の魔術師

銀色の綺麗な髪をした青い瞳の青年。誰もが一目見ただけで好青年だろうと分かるほど容姿にまで表れるその気品。その上頭脳明晰で体術も魔術も優秀とくれば、誰だってすぐに忘れられない名前になるだろう。

##### パルフ・エクト

イルスさえいなければ学問・実技ともにトップの成績を修め、文武両道の天才と言われただろう（もつとも2位なので文武両道なのには変わりないが）エクトは人に聞かれると決まってこう答えるらしい。

「しかたないよ、僕よりもつと勉強してる人がいるのだから、僕ももつと勉強を頑張らないとね」

まさに模範的で完璧な答えだ。これが一番人受けが良い答えだとしてもなかなかこう答えられる人はいない。そこがまた彼のすごいところなのかもしれない。

もちろんその答えの前に誰かがエクトに対して言ったセリフが「イルスさえいなければエクトが全てでトップなのに」ということはほぼ間違いないだろう。

森の中を歩きながらイルスはエクトのことを考える。

正直にいうと奴のことが羨ましくてしょうがないのだ。イルスのように目の色まで真っ黒な人間と違い、奴の銀色の髪は光り輝いて

見える。その発言は的確でその行動は正確でまさにリーダーになるべく生まれた人間だ。当然のように家柄も良くそれすらも腹立たしい。

何より無詠唱魔法を自由に使える。それだけでイルスにとってどれだけの価値があるのか分からない。

イルスの班の誰か1人が敵の班と遭遇したらしい。場所はここから300ほど離れたところだと気配が伝わる。

通常チームで行動する場合は事前にチームの人間全員に同じ魔方阵を装備させておく。大体は服に縫い付けてあったり、体にマーキングされていたりしてあり、今回の実技訓練ではゼツケンに魔方阵が縫い付けてある。この魔方阵をつけておくことによって同じ魔方阵を持っている人間に位置や状態、会話までを伝えることができる。また敵と接触すればその敵のことまで伝えることができるので小隊訓練ではこの魔方阵が必需品になる。つまり敵の1人に見つかれば、他の全員に居場所がばれてしまうということでもある。

こっちのチームは全員がいったんバラバラに散開し、あるポイントに向けて行動するような作戦を立てていて1人1人が結構離れた位置にいる。敵を見つけるのが非常に早くなるし上手くポイントまで敵をおびき寄せれば奇襲をかけやすいので速攻をかける点では結構有利になるのだが、敵が固まっていたり、各個撃破されると苦しくなる。

敵は2人一組で所定の位置を行動するような作戦を立てていたらしく、こっちの1人は早くも危険な気配を伝えてくる。リーダーがあわてて全員を援護に向かわせるが、それも読まれてしまい瞬く間

に1人のところをつかれ、集中攻撃を受ける。先手に回ろうとして意表をつつこうとしたものの冷静に対処され後手後手に回っているといった図だ。

リーダーはイルスにも指示を出しているのかも知れないが、会話は切斷してあるので分からない。といってもリーダーがイルスに指示をすることは無いと思うが。

と

歩き続けている俺の前にいきなりエクトが現れた。

こつちが驚いて立ち止まると同様に向こうも立ち止まる。おそらく魔方阵を通して指示を出していたところに急にイルスが現れエクトも驚いたのかもしれない。

時間にして数秒くらいだろうがしばらくお互いがお互いを見つめる。状況は完全にイルスにとって不利だ。味方は無く援護も期待できないこの状況でエクトと対峙してイルスに勝てる要素は1つも無い。なんとか振り切って逃げるべきか、味方の方まで上手く誘導するべきか、それとも逆に引き離すべきか。

しかしエクトはこちらをしばらく見たあと、少し笑いかけるとそのままイルスのほうまでゆっくりと歩き、止まることなく通り過ぎていった。



## 5・強い感情は時として心に支障をきたす

エクトはイルスをゆっくりと通り過ぎていった。

イルスに何もせず。

まるでなから君は敵じゃない、君をかまってる暇はないとも言っように。

体中からどす黒い気持ちがあふれ出てくるのが分かる。

その黒い塊は液体となって地を這うように、あるいは怪しげな煙となって体内から放出され、草を花を枯らし、鳥を虫を死に至らしめ、石や土を溶かし、自分自身すらも飲み込んでしまう。

ここまでの直情的な怒りは生まれて初めてだ。

エクトにとって、イルスを倒すか倒さないかはどうでもいいことだったのかもしれない。ただイルスを倒すための魔力がもつたいなと思ったのかもしれないし、それともイルスを倒すためのわずかな時間で形成逆転されることを恐れたのかもしれない。もしかしたらどうせ何もできないイルスを攻撃して怪我をさせるのは可哀想でも思っただのかもしれない。

しかしそんな様々な憶測でもイルスの感情を怒りに変えるには十分だし、

イルスに攻撃を決意させるのには十分だった。

すぐさま状況を確認する。

エクトはイルスからはなれた後、戦いの中心になっているところに向かったようだ。戦況は6対4でこちらの方が不利になっている。しかも戦いの中心にこちらのリーダーはいるようで、エクトは最後の締めにも自分も援護にいったのだろう。

足元に転がっているこぶし大の石を拾う。この訓練では武器の持ち込みは禁止されているが、フィールドにあるものは何でも使って良い。

石に魔方阵を書き準備を整える。

構成魔法による魔術の規模は魔方阵の大きさと複雑さ、こめる魔力の量に比例する。この場合は石も小さく魔方阵が描けるスペースがあまり無いので小規模でいい。

「……よし」

魔方阵を描きあげ、手に握り締める。

次に魔力を足に込め、脚力を増強する。体術と魔力による身体コントロールは自信があり、すぐに足に力がたまってくる。

エクトとリーダーが戦闘を開始したようで、リーダーの反応がどんどん弱くなっていく気配が感じられる。

イルスはエクトとリーダーがいる方向に体を向け、クラウチングスタートようにかがみこみ息を整える。

目標まで800メートル



タイミングを計り、スタートをきる。

600メートル

視力と腕に魔力を込める。

400

エクトとリーダーを確認、石をエクトに向けて投げ込む

200

100

突然飛んできた石にエクトは一瞬体が硬直する。

しかし、石の表面に魔方陣を視認し、少なくとも無詠唱魔法による攻撃じゃないことを確認、魔方陣の紋様から光性魔法による目くらましだと推測する。目をつぶって回避することにする。

その瞬間、石が強烈な光を放つ。

「……くっ」

放たれた光は暗い森の中を真っ白にし、目をつぶっていても強烈な光によって一瞬だけなら視界がぼやけるはずだ。

イルスは光を腕でさえぎり、そのままエクトに突っ込む。

渾身の力でエクトの腹部に突きを繰り出す。

しかし、放たれた拳はエクトに届くことなく水の壁に弾かれる。そして視力を取り戻したエクトに腕を払われる。

「魔法を使われてたら……危なかった」

エクトはそうつぶやき、俺の腹部に拳をつけた。

エクトの無詠唱魔法      水弾

水属性の魔法に属する無詠唱魔法を使えるエクトの放つ水弾は巨大な石さえも粉碎する力を持つという。

一瞬の衝撃のあとイルスの体はみるみるエクトから離れ、後ろにあつた木に叩きつけられようやく止まった。

実技訓練の際、始める前に頭の後ろに魔方阵を描かれる。強い衝撃や攻撃を与えられた際にその魔方阵が反応し、一時的に意識を切りとる。意識を切りとられた人は負けになり、その後の戦闘には参加できない。

目を覚ますと訓練は終わっていた。

イルスがやられた後すぐにリーダーも残った全員で攻撃され負けてしまったようだ。

エクトが目の前に立っていて手を差し出してくる。負けた今、怒りはそこまで無くエクトの手をとり立ち上がる。

「最後の攻撃は危なかったよ。もし魔法を使われたら危なかったね」

イルスが攻撃した際、エクトはとっさに水壁を作り身を守ったらしい。

「早く自分の属性の無詠唱魔法を身につけたらもっと強くなると思うよ」

その言葉にまたちょっと怒りが湧きそうになって                      しかし、すぐに収まり脱力感に変わる。

上から言うようなその言葉は確かに怒ってもいいような気がするが、何も知らないエクトからすればそう言うのは正解だし。本当にイルスが無詠唱魔法を使えないのならこの場合、怒ることより忠告をちゃんと聞き入れるほうが正解だ。

何より先ほど怒って負けたばかりだ。怒る意味が無い。

「ああ、忠告どうもありがとう」

そう答えて手を離し、エクトに背を向けて歩き出す。

本当は自分の属性なんてガキの頃から気づいているし、無詠唱魔法だって使えるのだ。

ただ

誰にも見せてはいけない。

それが魔法を使えない劣等魔術師の正体だった。

## 5・強い感情は時として心に支障をきたす（後書き）

初のバトルシーンですがなかなか上手く書けません。

こつしたほうが良いとか、ここが間違っているとありましたらどんどん指摘してください。

## 6・不機嫌な事件は動き出す。

幼い頃から師匠に口酸っぱく注意された。

「お前のその力とはとても厄介だから決して人に見せてはいけないよ」  
その注意は、言われるまでも無く幼いながらに絶対に守らなければならぬことは分かっていた。

もっと幼い頃には両親が俺の力を見て恐怖の悲鳴をあげた。

「ひい！化け物！」

おぼろげに残る記憶の中の両親の表情と悲鳴は俺に自分の力を使わせない覚悟を決めさせるには十分な威力を持っていた。思えば師匠があれだけ口を酸っぱくして注意していたのも、その力を使うことによつて起こる様々な不幸を憂いてのことだろう。

だがどうしようもない事件はいつだって唐突に起こり、人はなすすべもなく運命に流されていくものなのだ。

「勝手な行動をとるなよっ！」

リーダーの怒声が控え室に響き渡る。勝ったチームも負けたチームも戦闘の終了後にミーティングを行い、そこで反省点を考える。基本的に小隊訓練では教師はあまり介入しない。自分達で戦う判断をつけるためだ。

「お前があそこですじゃばらなければ……」

リーダーの怒声は、しかし後に続くことなく声を落としていく。確かにイルスが光魔法による目潰しをしたせいでリーダーは一時的に目がくらんでしまい、その結果敵に囲まれてしまったのは確か

だ。しかし、もともと作戦自体が個々人の判断に任せた奇襲戦であったし、どのみちイルスが介入しなくても負けていただろう。完全に作戦を読まれていた。

リーダーもそのことは判っているからこそ、余計に誰かのせいにしたいのだ。誰だって自分のミスは認めたくないのだ。

「分かったよ、俺が悪かった。それでもう良いだろ」

これ以上反省を続けても何も変わりそうになかったので、そう言うといルスは早々に部屋をでた。

全ての授業が終わり、校舎を出る。

部活にも課外活動にも参加していないイルスは、普段はすぐ寮に帰り自分の部屋で夕食の時間まで勉強をする。夕食が終わった後も眠くなるまで勉強を続ける。これだけ勉強すれば学問でトップを取るのも不思議ではない。

イルスの故郷はクラリエット国の領内にあるものの、クラリエットから離れた国境付近にある小さな町である。王国とその他の町では明確な差があり、普通町の人が王国に移り住むことはない。町に住む人は多くの場合、一生を町の中で過ごす。

しかし、イルスの場合その多大な魔力とトップクラスの学力成績で町の先生による推薦でクラリエット王立高等学校へ入学することになった。イルスは別に王国に興味はなかったが町の先生の説得の手前断ることができず入学することになった。

結果、無詠唱魔法を使うことができず、劣等性のステッカーを貼られることになってしまった。

本来なら目立ちたくないことで学問であろうとトップにはなりたくないのだが、魔法が使えない以上実技の成績は望めず、退学にならないためにも学力で補うしかないのだ。

それがまた他の生徒の気に触り、悪循環を生み出していく。

「おっと、そういえば買い物を頼まれてたんだ」

寮へと帰る途中で、管理人さんに買い物を頼まれていたことを思い出し、あわてて市場へと向かう。寮は学校と市場の中間くらいにあるので、市場に行くのは遠回りになってしまっただが管理人の頼みだからしょうがない。

「あの人の頼みを断ると料理を作ってくれなくなるからなー」

足早に市場へ行くと、平日にも関わらず市場は相変わらず人であふれかえっている。管理人に頼まれていたものを買い込むと、特に買いたいものもなかったし人ごみが苦手だから帰ろうと寮へと足に向けた。

「待てー！」

突然大きな声が市場に響き渡り、人々の動きが止まる。



驚いて後ろを振り向くと、男がこちらへと突っ込んできた。

## 7・1番隊長

「待てっ！」

二度目の言葉に、しかし男は止まらず速度を早めこちらに近づいてくる。

「どけどけ、殺されてーのか！」

男はそういつて周囲を押しつけながら進むと、声に気圧されたのか人々があわてて飛び退き、男の前に道を作っていく。が、とつさのことに面食らったイルスは取り残され、一人男の前に対峙することになった。

「じゃまだつつつてんだろ！」

男はイルスに向かってかけていくと、拳を握り締め、片腕を大きく広げ、ラリアットのように振りかざした腕をイルスの顔面に放った。

### 本日二度目の衝撃

男の放った理不尽な攻撃は訓練の時にエクトが繰り出した水弾には多少劣るが、それでもイルスの顔面にジャストミートし、イルスは大きくのけぞり倒れた。

男は障害を排除したことに満足し、いったん立ち止まった。そして後ろを確認し、また逃げるために走り出そうとイルスの体を足で

蹴飛ばした。

## 本日三度目の衝撃

(……なんで俺こんな目にあってるんだ?)

理不尽だ、理不尽すぎる。

エクトにやられたのはしょうがないとして、なぜ見ず知らずの人間にラリアットされた上に、蹴飛ばされないといけないんだ?俺は普通に暮らしてるだけなのに。いや、確かに隠してる不通じゃないことはいろいろあるけど。

こんないろいろなことに耐えているのに、なぜこんなにも理不尽な仕置きばかりがあるのだろうか。神様がいるならやはり俺は嫌われているんじゃないか。

一瞬にして泣き言で埋め尽くされたイルスの思考回路だったのが、男の逃げる足元を見たときとたん急激な怒りがこみ上げてきた。

思わず手を伸ばし、掴んだ男の足を思いっきり引っ張った。

「おわっ!」

酷く間拔けな音を出して男は顔面から地面にぶつかった。

顔を押さえてうめきのた打ち回る男を尻目に、イルスは痛みがまだひかぬ顔を撫でながらゆっくりと立ち上がる。辺りはざわざわして、人々が回りを囲み今起きている出来事に固唾を飲んで、先ほど大声を出していた人はまだこちらに来れないらしく、後ろからあわただしい音が聞こえる。周りの人間を見た限り顔見知りはいないようだ。

(これならいいだろう)

イルスは冷静に怒りを体外へ解き放った。

「てめえ、何しやる！」

痛みがひいたのか男は顔を真っ赤にしながらフラフラと立ち上がる。イルスを焦点の合わない目で睨みつけ。再度拳を握り締め目の前に立つイルスに飛び掛る。

「この野郎！」

しかし男の怒声に反して、駆け込もうとした体は急に重くなったかのようにガクツと崩れ落ちそうになる。

そして男の顔が驚きの表情を作る暇も与えず、イルスは男の顔面に掌底を放つ。

その瞬間男は、声も出さずに崩れ落ちた。

しばらくイルスも周りにいた人達も何も言えず沈黙した空気が辺りに流れた。

「その男を止めてくれてありがとう」

沈黙を最初に破ったのは、このこの男を追いかけていた人だった。その人は人の壁を割ってイルスに近づくと話を続けた。

「その男は近くの商店で窃盗をしていてね、見過ごせないものだから追いかけていたんだ」

「何か礼をしたいから、名前を覚えてくれないか」

「いえいえ、殴られたので殴り返しただけですよ」

と言葉を続けたところで、近づいてきた人物　女性を見てびっくりする。

その女性、長く少し赤みがかった茶色の髪を後ろで縛り、真っ赤な瞳の整った顔立ち、そして上品な立ち振る舞いと王国軍の隊員だけにしか装備することを許されていない独特な形の剣を腰に下げた姿は、よく国王のパレードや祭りの際に見た事のある、話すことも恐れ多い存在であった。

1番隊隊長　ホルス・フィレア隊長。国で一番強い女性といわれている人だった。

「む？」

驚いて言葉を発することができずにいるイルスを前にフィレアは周囲を見て奇妙な表情を見せる。あわててみると周りには確かに奇妙な光景が広がっていた。

周りで成り行きを見守っていた人達が一人、また一人と倒れていったのだ。

倒れていないひとどこか苦しそうな表情を浮かべ、今にも倒れそうだった。

フィレアはさらに不思議そうな顔をする。それもそのはず、1人が道端で急に倒れることがあっても2、3人が何もないとところで一斉に倒れるなどめったにあることではない。それなのに今この場では5人以上の人間が何もされていないはずなのに倒れていつてるからだ。この光景を見て不思議に思わない人はいないだろう。

そう、この光景を見て納得できるのは今のところイルスしかない。

（やばいやばいやばいやばい……やっぱり制御が上手くいってなかったんだ）

イルスは心の中で動揺を隠せずに次の行動を考える。

「これは……どうしたことだ？」

怪訝な顔をしているフィレアを無視して、後ろを向くと、イルスは一目散に人がまばらな場所へ駆け出した。

こうなったら逃げるしかない。

そう決心したイルスはフィレアが話出すのを待ちながら足に力を入れていたのだ。

「あっおい！待て！」

先ほども聞こえた声が、先ほどとは違った意味で聞こえてくる。

イルスは一転追われる身になってしまった。

## 7・1番隊隊長（後書き）

若干気力が途切れてきたので更新スピードは遅くなるかもしれません。

なかなか文章が上手く作れないので読みにくいかと思われますが文章のご指摘などがあればよろしくお願いします。

あと、お気に入り登録してくれてる方もいらっしやるみたいで、こんな拙い文を読んでいただきありがとうございます。

## 8・フィレアの微笑み

人ごみを掻き分け走り抜ける。走る。

途中にあつたわき道を曲がり細長い小道を突き進む。慎重に慎重を重ねているんな道をジグザグ曲がりながら遠回りをして、寮へと戻った頃には辺りが暗くなっていた。

「これだけ時間をかければ逃げ切れただろう」

最も最初の小道を入った頃から、追いかけてきている気配はなかったが念を入れて何度も周辺を確認しながら走り回った。

相手は最強の女と呼ばれている人だ。どんな術が使えるか分かったものではない。

（それにしても……）

人々が次々に苦しそうな顔をして倒れる姿は、とても奇妙な光景でイルス以外の誰しもがこの光景に不自然を感じたことだろう。特に間近で見っていたフィレア隊長は明らかに不審な目で見ていた。もしあれが不自然に思われ、調査をされたりしたらあの場にいたイルスの立場が一気に悪くなるのは間違いない。

あれはイルスの魔法が原因なのだから。

そうこうしているうちに寮にたどり着いた。寮は2階立てになっていて2階の一番奥にイルスの部屋はあるが、まずはおつかいを頼まれていたので買い物を寮の管理人さんへと渡しに行く。



「遅かったじゃないか、道草でもくつてたのか？」

寮の1階に住む管理人　　イシユア・マリーは今年で30歳になる女性だ。イルスよりも身長が高く、少し見上げるような形で見た顔は若干怒っているのか険しい。寮に住んでいる学生と間違えられることもあるほど若く見え、なぜ寮の管理人なんかをやっているのだろうかと不思議になるほどマリーは美人なのだが、礼儀や時間に厳しく一度怒らせると大変やつかいな存在になると、寮に住む生徒の中では恐怖の対象として扱われていたのだった。

「ごめんなさい。ちよつと市場で事件に巻き込まれてまして」

ごまかしても仕方ないので素直に理由を説明する。

「事件！？大丈夫か？怪我とかしてないか？」

マリーは心配そうな顔をしてイルスの顔を覗き込む。実は誰に対しても優しく、どんなことも親身になって聞いてくれるというのもマリーの魅力の1つなのだろう。寮に住むものの中でマリーに逆らうものは1人もいない。

「ん？顔のところちよつとすりむいてるじゃないか、今消毒してやるからちよつと待ってなさい」

イルスの顔の怪我を見つけると、すぐに戸棚のほうへ向かい消毒液を取り出す。先ほどの市場で男に殴られたとき顔を汚したらしい。

「いいですよ、消毒なんて」

あわてて逃げようとするが、戻ってきたマリーに肩を掴まれる。

「ダメだ、お前はせっかく顔はまあまあ何だから綺麗にしておかないと」

それから頭をがっちり固定し丁寧に消毒液をつけてくれる。自然と顔が近づきちよつと恥ずかしくなる。手が触れている部分の顔が少しだけ熱く感じる。

「よし、これで大丈夫。お風呂に入るときは気をつけなさいよ」

そういつてマリーはイルスの頭を軽く小突く。恥ずかしくなったイルスはマリーに頼まれていた品物を渡すと急いで2階に上がる。

「夕食には遅れないように」

後ろからマリーの声が聞こえたが返事はしなかった。

「遅かったじゃないか」

部屋に入るとベッドに座っていた人間が立ち上がり、イルスの前まで歩いてきた。

「今日会うのは二度目だが改めて挨拶しよう。ホルス・フィレアだ、よろしくグウェン・イルス君」

そういつて軽く笑うと真っ赤な瞳の女性は、驚いて何もいえないでいるイルスに手を差し出した。

## 8・フィレアの微笑み（後書き）

ちよつと短いですが区切りがいいのでここで区切ります。

イルスはマーリのことが好きなわけではなく、多分思春期特有の照れみたいなものなんだと思います。

## 9・どうにもならない状況と呪われた魔法

「グウエン・イルス」

フィレアは口を開く。

その後、イルスとフィレア隊長は夕食の準備をしている寮を後にして、すぐそばにある広場へたどり着いた。そのときフィレア隊長とマリーさんの間で一騒動あったのだが今はそれを特記するような状況ではないので省略しておく。顔見知りだったのかもしれない。

「グウエン・イルス

クラリエット王立高等学校普通科、2年

Bクラスに所属。成績は学問は文句なしのトップ、実技はこれまた文句なしの最下位か……総合成績は半分より下……これはクラリエット国が実技のほうを優位においてるからだろうな。黒髪の黒目というこの国では珍しい色の髪と目の色を持つ。身長は男子の平均身長よりは低く、今は学校の近くの学生寮で暮らしている。」

フィレアは目にした資料を読むかのように淡々とイルスの情報を口に出していく。もちろん目はイルスのほうを見ながら、反応を楽しむかのように言葉を続けていく。

イルスは口を開かない。

「そんなに驚かないでくれ。王国には王国に住む全ての人の情報を調べ、整理する機関があつて隊長クラスの軍人や大臣クラスの文官は情報を好きに閲覧することができるのさ。もっとも君のことは結構有名ではあるんだよ。『魔法の使えない天才』 王国軍は常に人手不足でね、スカウトのためにいろんな学校の優秀な生徒を調べていたりするんだ。君のクラスにはあのクラリエット随一の優秀生といわれるパルフ・エクトくんだっているしね」

そういつてフィレアはいったん話を区切り、イルスの反応を見る。  
イルスは口を開かない。

「そんなに顔をこわばらせないでくれ。別にとつて食おうなんて今のところは思つてないよ。私は君のその力に興味があるだけなんだ」

それでもイルスは口を開かない。

「うーん……こちらから喋り続けるのは性に合わないのだけだね。まあいいか、話を続けよう。君が逃げた後追いかけようと思つたがそれは後に回してまず倒れている人の状態を見ることにしたんだ。不思議なことに倒れていた人達は全員が顔を真っ赤にして息苦しうにしてたかと思うとすぐに落ち着いた顔になり眠つてしまったんだ。さらに起こして話を聞いてみても倒れる少し前までの記憶がぼやけているらしい。その上不思議なことに君が倒した男も他の人達とまったく同じ症状で眠つてしまつていたみたいだ。これがどういうことか分かるかい？」

フィレアはイルスにそう尋ねるが、イルスはまたしても答えなかった。

かまわずフィレアは話を続ける。

「私はこれらの現象を君の仕業ではないかと考えたんだ。そうでないと君が逃げた理由が分からないからね。ああ、心配しなくても軍のほうには、逃げた男が苦し紛れに何かの魔法を使おうとして失敗したということにしておいたよ。この件で調べてるのは私だけだ」

その言葉にちょっとだけ反応してしまった。しかしイルスから話すことはしない。

「君の仕業だろうと検討をつけたのはいいが君が何をしたのかはまったく分からなかった。あの瞬間、魔方陣を描く余裕も呪文を唱える時間も君にはなかったからね。それなのに魔法を使えない君が複数の人に効果を与えられるようなことをした。これはどう考えてもつじつまが合わない。そこで前提を変えて考えてみた。『もしかしたらグウェン・イルスは魔法を使えるのではないか』とね」

「そう考えるとつじつまが合う。あの瞬間、君は無詠唱魔法を使った。無詠唱魔法ならあの一瞬の間でも使うことは可能だからね。その結果あの男どころか周りにいた人までもが君の魔法を受けてしまった。違ukai?……ただそうなると次に問題になってくるのは君が使った魔法だ。私の知る限りでいっぺんに複数の人間にあんな反応を与える魔法なんて5大属性にはないからね」

ここまでくるともうイルスには何も話すこともできない。  
静かに、ただ静かに話しを聴くよりほかになかった。

「ずばり君の魔法は5大属性のどの属性にも含まれていないのだろう。極まれにそういった人間が生まれてくるとい話聞いたことがある。この目で見るのは初めてだね。そう思えば君が逃げたのにも納得がいく、君の魔法は誰にも気づかれてはいけないようなものなのだろう。失礼だが君の過去を調べさせてもらった。君はこの国に来る前はクラリエット領に所属する町で暮らしていたみたいだが、生まれたのは違う村のようだね。しかもその村はある事件で」

「黙れ！」

イルスはついに魔力を開放し、ありったけの力でフィレアに突進した。

しかし力いっぱい放った拳はフィレアに簡単に受け止められてしまった。

「やれやれ、君は話してる途中に不意打ちするのが好きみたいだね。でもやっとな反応してくれて嬉しいよ」

そういつてフィレアは思いっきりイルスを蹴り上げた。

1時間ほど戦っていたのだろうか、それともまだ5分も経っていないかも知れない。

イルスは広場の真ん中で大の字に倒れこんでいた。

「大丈夫かい？学生なのに結構強いんだね」

フィレアはそういつてイルスの顔を覗き込みながら微笑む。イルスの体はズタボロで怪我だらけだがフィレアには傷1つなかった。

あれから何度もフィレアに打ち込んだがことごとく受け流され、イルスの体術はまったくフィレアには届かなかったのだ。

「とりあえず私はこれから夕食にしようと思うのだが、君も一緒にどうだい？」

フィレアは今までのがなんでもなかったかのようにイルスに話しかけた。イルスは悔しさやあきらめなどのいろいろな気持ちが

入り混じり、何もこたえられなかった。

「おっとその前に……そろそろ君の『毒魔法』を解除してくれないかい？」

そういつてフィレアは苦笑すると、少し苦しそうに血を吐き咽た。

結局イルスは何も答えることができず諦め、フィレアに放った毒魔法を解除した。



## 9・どうにもならない状況と呪われた魔法（後書き）

なんだかサスペンスみたいな感じになってます。

やっとな主人公の能力判明しました。

あと前半はイルスの視点から始まってます。ちなみに戦闘を省いたのはこれから戦闘シーンがたくさん出てくるだろうからちょっとくらい省いてもいいかなーと（笑）

全体的に暗いのですが次からギャグシーンも加えていきたいと思えます。

## 10・スカウト

夜遅くまで営業をしている店というのは大抵とても高級な店か安っぽい店かであり、ボロボロになったイルスをつれてフィレアが笑顔で来店しても、落ち着いた対応で案内してくれる店員を見る限りここはとても高級な店なのかもしれない。もしくはフィレアがこうやってることがよくあるからなのかもしれないが。

そう思っただ員についていくと、案内されたのは個室で料理もあきらかに高級品を使ってあり夕食をとっていなかったイルスは思わず唾を飲み込んだ。

しかし待っていたのは口を切ったことで食事が口の中に入るたびに生じるチクチクした痛みと、長々といったフィレアの説教だった。

「いや、決断力と思い切りの良さは評価するよ。確かにあそこで私を殺せば君の魔法の正体を知るものはいなくなるわけだからね」

そういうとフィレアは手に持っていたコップに口をつけ一気に飲み干す。ちなみに中に入ってるのは葡萄酒だ。

「だがもしあそこで私を殺してたら君はどうするつもりだったんだ。いくら私が君の事を誰にも話していなかったとしても、私の今日の行動をたどれば君が殺したんじゃないかという疑いくらい出てくるぞ。しかも寮で堂々と君と一緒に外に出ているからね」

どうやらフィレアは酒を飲むと人にかまらずにはいられなくなるらしい。先ほどからイルスの反省点をあげつらえ、そろそろ1時間近くたつ。

（というかさっきまで自分を殺そうとしていた相手によく自分を

殺したらなんて話ができるな)

そう思いながらイルスは自分のコップに口をつける。イルスが未成年なのにも関わらず強引に葡萄酒を注がれたのだが、断ることもできずにちびちびと飲み続け、ようやく半分まで空けたところだ。

「こら、人が話してるのだからちゃんと反応しなさい」

そういつてフィレアはイルスの鼻を指で弾く。

「くっ！……はい」

「それに戦い方だってまだまだ未熟だな。最初の一撃は不意を突かれたから防御にまわったが後の攻撃は軍の人間ならほとんど回避できるぞ。この頬の傷だって私に攻撃をかわされ逆にカウンターをくらった傷だろ？」

鼻を弾いた方の手で今度はイルスの頬を容赦なくつねる。

「痛っー！」

いきなりの激痛にたまらずイルスは声を上げる。それをフィレアは笑顔で満足そうに見届ける。

「ふっふっふっ、私を殺そうとした罰だ。それにしてももし毒魔法の毒で私が体調を崩していなかったら逆に勢いあまって殺してたのは私の方だったかもしれないぞ」

そう言い放つとフィレアは店員を呼び、追加の酒を注文した。

「それにしても毒魔法とはな……」

店員が持ってきた酒をコップに注ぎフィレアは呟いた。ついでにもう少しで飲み終わると思っていたイルスのコップにも同じ量の酒を注ぐ。

「身をもって経験したがなかなか厄介な魔法だな」

そういつてイルスの顔を覗き込む。イルスの今までの人生を案じ

たのかその目にはいくらの同情の色が映っていた。

イルスはその目を避け、自分の前にある食事を片付けることに専念した。それに続いたのかフィレアも自分の食事に手をつける。

自分の魔法に気づいたのはいつの頃だろう。

とても幼い頃には自分の存在が恐ろしい存在なのだと思っていた。両親に「化け物」と恐れられたのも自分が本当に化け物だからなのだと思い込んでいた。しかし、いつからかそれは自分の存在ではなく自分の魔法のせいなのだと気づいてしまった。「恐ろしい魔法を使う自分」が化け物なのだと。

自分が体外に放つ魔力は炎も水も生み出すことなく、まるで毒のように相手を苦しめ、あるいは睡眠を誘い、……場合によっては死なせてしまう。そこには対象もなにもなくただイルスの魔法に触れた人間を犯す、無差別の恐怖だけが存在する。

「フィレアさんは」

食事も多くが片付き、後はデザートを食べてひと息つくだけといった余韻の中で、イルスは始めて自分から話しかけた。フィレアはデザートを綺麗に平らげ、お酒を美味しそうに飲みつつ、イルスのほうを見た。

「フィレアさんは、どうしてさっきまで殺そうとしていた人間、俺と一緒に夕食を食べているんですか。俺をどうするつもりなんですか？」

その言葉にフィレアは飲んでいたコップを下ろすと、思案顔でイルスを見つめた。

「うーん」

フィレアは困ったように首をひねるといったん視線を外し下を見つめる。

「そうだねー君の魔法に興味があつたつて言うのと、何か面白い話があるんじゃないかと思って夕食に誘って見たわけだが……」

「あえて言うならスカウトかな？」

フィレアはもう一度イルスの顔を見て言い放つ。

（は？）

フィレアの放った一言に今度はイルスが思案してしまう。スカウトとはどこにスカウトするつもりなのか、そして何故そのような話になったのか。自分がさっきした質問とフィレアの答えを照らしても何も浮かんでこない。

今日1日での会話の中からイルスから見たフィレアの人間像が着実に構築されていく。

（この人は何も考えていないのではないか？）

イルスは解読不能な難問を見ているかのように、笑顔で酒を飲んでいるフィレアを呆然と眺めた。

## 10・スカウト（後書き）

なんとか前半のシリアスな雰囲気を払拭しようと思ったけど無理でした。

## 11・とんでもない人達の今日これから 前編

怒涛の1日が過ぎて、1週間が経った。その間は何事もなく、普段と変わらない毎日が進んでいた。

いや、普段と変わらないのは生活態度だけであり、少なくともイルスの心境は安定したものとは言えなかった。

今までの17年間ひたすら、ひた隠ししていた自分の秘密を知られてしまった。しかもその日に初めて会った人にだ。親や一部の親密な人意外にしか知られていなかったイルスの禁忌ともいつていい魔法はよりによって一番知られてはいけない部類にいる人間に知られてしまったのだ。

基本的に全ての人間の無詠唱魔法は、5大属性である火・水・雷・風・金から外れることはない。それが5大属性とはまったく違う無詠唱魔法を使えるというだけで1国で騒ぎ立てられるほどのレベルなのに、イルスの無詠唱魔法は「毒魔法」というあまりにも非常識すぎる魔法だ。使うだけで人を苦しめるそれは、ばれてしまえば人々を恐怖に落とし入れ、イルスをますます孤独にするだろう。

そんな危険すぎる秘密を、王国軍の1番隊隊長であるフィレアに見破られた。

これははつきりいつてイルスの人生最大のピンチだといってもかまわない。いつ5大属性以外の魔法として、研究対象として捕らえられ、体の隅々を解剖されるか、または危険魔法を使える危険人物として捕らえられ、処刑されるか。

しかもイルスがその日フィレアにした行動を考えれば間違いなく後者だろう。

（今にして思えば、俺は何であの時魔法なんか使ってしまったのだろっ）

あの時、あの場所にいなければ……あの男と戦うこともなかっただろっ。

あの日、エクトの言葉にキレたりしなければ……むしゃくしゃして自分だって無詠唱魔法を使いたいなんて思わなかっただろっ。

あの年、先生の推薦を断っていた……ここに来ることもなかった。

あの町に行かなければ……

事件が起きなければ……

生まれてこなければ……

こうした後悔の不安の固まりがイルスを常に襲う。  
そのたびにイルスは自分でも分からない何者かに、怒り、怖がり、むしゃくしゃしたりを繰り返させられるのだった。

そうして次にフィレアにあったのは終業式も終わり、次の学年に進むまでの長い長い春休みが始まったその日だった。



「おはよう、イルス」

その日。春休み初日。

朝目を覚まされ寝ぼけた眼で見た最初の景色は、満面の笑みを浮かべるフィレアの顔だけだった。

朝目を開いたら、いきなり軍で一番強い人間と呼ばれる人の顔がアップで移されていた。

(……なんの映画だあ?)

そう思い、呆然とするイルスをフィレアは笑いながら外まで引きずりだした。

そして、呆然とするイルスを引きつれそのまま外のうるさい繁華街をどしどしと突き進んだ。

そして、呆然とするイルスをよそにフィレアの足取りは迷うことなく、イルスの未だ踏み入れたことすらない場所へと踏み込んだいった。

王国の中心地

フォルチ城へと



11・とんでもない人達の今日これから 前編（後書き）

多分最大に文章が短いですが許してください。

12・とんでもない人たちの今日これから 後編（前書き）

1月30日リナの年齢を変更しました。

## 12・とんでもない人たちの今日これから 後編

「というわけで、グウェン・イルスを今日より2番隊へ入隊させることにしました」

いきなりフォルチ城の中にある王国軍施設に入ると、いきなり全ての部隊の隊員を召集した。そしてイルスを横に立たせたまま全員の前に立ち、まずイルスに自己紹介をさせた。そしてまだ事態がつかめず茫然としているイルスがたどたどしくも自己紹介をし終えると、続けてこう言い放ったのだ。

（へっ？）

一言で今の心境を答えろといわれたらこれ以上の言葉はないというくらい、今の心境は分かりやすかった。何しろいきなり自分が軍に入隊させられてしまったというのだ。突然のことに戸惑うしかなかった。そしてそれはイルスだけではなく目の前にいる、大勢の軍人も同様に戸惑っているに違いない。しかし、さすがに訓練されているからなのか、まだ状況が掴めないからなのか、軍人達はざわめくことなく立っていた。

（この人、本当に頭がおかしいんじゃないのか）

イルスは冗談ではなく本気でフィレアの頭を心配した。

「あの、それは俺に拒否権はないんですか」

こんな大人数を巻き込んだの数秒の沈黙に耐え切れなくなったイ

ルスはフィレアに小声で聞いてみる。いろいろ聞きたいことは山ほどあるが、今大事なのはこの局面を避けることができるかどうかだ。

「うん、ないな。断れば君は私への暴行罪と反逆罪で死刑だ」

どうやら拒否することはできないらしい。そしてさらつと酷いことを言い放った。どうやらイルスを容赦なくボコボコにしたあの事件は、フィレアの中ではイルスに暴行された事件となってるようだ。

（間違つてはいないけど……理不尽だ……）

拒否できないと言われた以上、他の質問をする気にもなれずイルスは押し黙ってしまった。

「ちょっと待ちなさいよ！何勝手にあたしの隊に変なのを入れようとしてるの！」

突然、前方から大きな叫び声がした。見ると隊員の中にいた一人がつかつかとフィレアの前まで歩いてきた。

「おお、リナいたのか。イルス、こちらが2番隊隊長　　コウリメ・リナ隊長だ」

リナからの追求をまったく気にせずフィレアはイルスに2番隊隊長を紹介する。

2番隊隊長　　コウリメ・リナはショートでウェーブがかった緑色の髪に緑色の目をした不思議な雰囲気をもった女性だ。整った顔立ちをしていて、かわいらしくイルスと同じくらいの年齢に見えるが、実際も21歳と若い。意気込んで紅潮した顔はフィレアをギラリと睨みつけていた。

リナもフィレアに負けず劣らず有名な存在である。19歳という

若さでありながら、入隊して半年後には2番隊の隊長に就任したという、歴代最短就任記録を持っている。その才能あふれる実績とどのような場面でも笑顔を絶やすことのないフィレアとは反対に公式の場ではまったく姿を見せず、見せてもまったくの無表情で淡々と軍務をこなす様から「新月の魔術師」と揶揄される人だ。

しかし、そのような噂は今イルスの前で音もなく崩れ去った。

「だいたいあんたもあんたよ！天下の2番隊に入れるという話なのに。拒否できるか聞くなんて！普通土下座しても入れないところなのよ！」

リナはイルスのほうを振り向き、睨みつけるように言った。そのあまりにも理不尽な怒りにイルスはたじろぐ。

それで気はすんだのかリナはフィレアの方を向くと続けざまに文句を言った。

「それに、普通入れるなら自分の隊でしょ！何で1番隊に入れてあげないのよ！」

「うむ、私の隊に入れてもいいのだが、私の隊よりリナの隊のほうがいいと思うてな。それに私の隊だとイルスにはきついだろうし」

「なにー？じゃあ私の隊ならこいつでも入れられるって言うわけ？2番隊をなめるんじゃないわよ！」

そういつてリナは怒りで顔を真っ赤にする。確かに今の話では怒っても無理はない。

それから何度もフィレアの隊に入れなさいというリナの言葉に、フィレアはまったくとりつかず。何度もイルスをリナの隊に入れるように頼んだ。最後は命令口調になっていたが。

そのところやはり1番隊の隊長というのは他の隊より権限が上らしい。

これ以上どう言っても無駄だと感じたのか、リナはイルスのほうをじつと見ながら1つため息をついた。

「グウエン・イルス……『魔法の使えない天才』っていう奴でしょ。こんな『頭良くて戦えないようなクズ』なんて私の隊はおろかどこにいったって使えないわ。それにまだ学生でしょ？ 軍に入るのはまだしも部隊なんて早すぎる」

まるでゴミでも見るかのようにリナは言い放った。

イルスなんていうゴミいらないと。

その言葉、その目、その態度全てがイルスを突き刺すかのように。

しかし、フィレアの次の言葉はそんなリナを決定的に怒らせるものだった。

「彼は弱くないよ、そして彼の『力』はリナには非常に役に立つものだと私は思う。それに年のことで言えばリナだって入隊した時は19だっただろ。彼とそんなに変わるわけじゃない」

例え年齢の話であろうと、クズとまでいったイルスと自分を変えないといわれたことに非常に腹を立てたらしい。リナは少し俯くとぶつぶつと呟きだした。

「そう……変わらないか……じゃあその『力』とやらをためさせてもらおうじゃないの！」

再び顔を上げたリナは殺意にあふれた目でイルスを捉え、イルスに向かって手を振りかざした。



12・とんでもない人たちの今日これから 後編（後書き）

前半後半と分けたのにまとまってないという……

あと2話程度で1部終了です。

なんか自分で書いててなんだけどリナがヒステリックみたいだ……

### 13・戦闘は激しく始まり

瞬間、横から衝撃を受けて受けたほうとは逆のほうへ体はよろける。

何だ！？と思って振り向くイルスの目の前を水の柱が通り過ぎた。手の平くらいの大きさの水柱は先ほどまでイルスの頭部があった位置を通り過ぎると、背後にあった壁にドンツという音をたてぶつかった。

辺りに水しぶきが舞い散る。

「へえー今のを避けれるなんて、やるじゃん」

リナは少し笑いを含んだ口をしてそういった。依然として緑色の瞳はさらに緑を増すかのようにイルスをにらみ続けている。

無詠唱魔法      水弾

リナの無詠唱魔法の属性は、あの日      フィレアと衝撃的な出会いをする前にイルスがエクトから受けた無詠唱魔法と同じ、水属性だった。しかし威力も軽く、水の量も少なかったエクトの水弾（エクトは手加減したのかもしれないが）とは違ってリナの水弾は威力も水量も人を殺すには申し分のないレベルだった。

「さすがフィレアが推薦してるだけあるじゃない。魔法が使えなくても避けることはできるか」

手を構えたままりナはちらつとフィレアの方を見る。

違う。イルスに魔法があたりなかったのはとっさにフィレアがイルスを突き飛ばしたからだ。フィレアが何もしなければイルスはあのままりナの水弾に吹き飛ばされ、この世からも弾き飛んでいたか

もしれない。

そう思いながらフィレアのほうを見ると、フィレアは少し考えてから口を開いた。

「うん、そうだな。確かに直接イルスの力を見てもらったほうがいいかな」

そして、イルスの方を向き、笑顔で声をかけた。

「イルス、『君の力』を思いっきり見せてやりなさい」

「だったら早くしたほうがいいわよ。あんたが『力』とやらを見せるまで生かしておけるほど、あたし、力のコントロールは上手くないから！」

リナは構えた手をそのままに体に力を込める。はたから見ても分かるほど、体中に魔力がいきわたり、特に手には尋常じゃないほどの魔力が集中している。魔力の増大に呼応するように震える手先には水の球が生まれ、だんだんとその体積を増していく。

「ほら！イルスも戦うんだ！」

フィレアの言葉にイルスはあわてて臨戦態勢をとる。体中に魔力を行き渡らせ、どんな攻撃がきても反応できるようにする。そうした上で体内に留まっている魔力を頭の中で構築した『ある属性』の思考式を通して、体外に魔術として放出する。

そう、イルスが今までひたすら隠し続けてきた、忌み嫌われる属性の魔術に。

体全体から放出された魔法は見えない煙のように、微細な物質になり、空気と混ざり、辺りに漂う。そして放たれたそれは風とともに王国軍施設内の広い空間の中を縦横無尽に駆け回る。

普段なら絶対に使わない、使ってはいけない魔法を使う。そのことがイルスを少し戸惑わせる。しかしフィレアの言った一言がイル

スの気持ちを奮い立たせる。

自分の『力』をみせる

自分の本当の力はリナに通じるのか

しかし、それ以上にある思いがイルスの魔力を強くさせるのだった。

（本気で立ち向かわないと、あの女に殺される！）

あたり一面に水たまりが出来上がる。

大勢いた隊員達もほぼ全員が避難していて（あるものは流れ弾にあたつて大怪我をしてしまった）イルスとリナを残して遠くからの戦いを見届けている。

「ちょこまか逃げ回るな！」

リナはそう叫びながら、水弾を連続で放つ。

イルスはその一つ一つをギリギリでかわしつつ、逃げ惑う。この状態で既に30分ほど時間が経過している。

（そんなこと言っても、1つでもあたれば死んじゃうだろ！）

そう思っているが言い返せない。言い返す暇がない。避けることにしか集中することができないほどリナの攻撃は精確でピンポイントにイルスの首を狙ってくる。

「避けてばかりいないで攻撃をしてきなさいよ！」

リナは攻撃をする手を休めることなく、イルスを狙いながら言い放つ。怒ってはいいたが、戦闘に関してはリナは冷静に自分の攻撃を進めていた。自分の攻撃とそれを避けるイルスの動きを見極め、イルスの次の行動を予測し、そこについて攻撃する。

戦局はどうみてもリナが圧倒的に有利で、あと20分もすればイルスがその水弾に弾き飛ばされるのは簡単に予想できた。

しかしその20分後、戦局は意外な方向へと向かっていった。

何かおかしい

リナが違和感に気づいたのは、自分が優勢に立ち回っていると自覚してからしばらく経ってのことだった。

最初に現れた症状は、息の弾みと体温の上昇だった。自分の中では激しい攻撃をしているわけではないのに、息が弾み、体温の上昇を感じる。リナは初めのうちは、それは自分がそこまで怒っているのだらうと、無視して攻撃を続けた。

何かおかしい

次に気づいたのは、自分の攻撃が自分の狙っているところと若干ずれているということだ。リナはあわてて狙いを修正するが、今度は修正したほうへずれてしまう。やがてどんどんずれてきてもはや自分の狙った場所にまったく水弾が当たらなくなった。

そうなるとイルスはもう走りながら避けるということをやめ、体を動かすだけでリナの攻撃を避けるようになっていた。

「あんたが……何かをしたの？」

そうイルスに向かってつぶやいたリナの表情は苦痛にゆがんでいた。

### 13・戦闘は激しく始まり（後書き）

更新が結構遅れてしまいました。

ちよっと忙しかったのと、どういう展開にしようかちよっと迷っていました。

次でたぶん第1部終了です。

イルスとリナの勝負はどうなるのか!?

## 14・終わりの憂鬱、始まりの不幸

離れていたところから見ていた隊員たちは、誰もが自分の目を疑った。

終始一貫先手を取り続け、あとは相手を捉えるまで攻撃をし続けるだけのはずだった戦況が、いつの間にか攻撃の速度が遅くなり、攻撃自体も鈍く、キレがなくなり、ついには攻撃が止まってしまったのだ。

その上戦っているのは、あの2番隊隊長であるコウリメ・リナである。若くして2番隊の隊長を任せられているという彼女の才能と実力は、誰もが認めるものであり、将来的には1番隊隊長であるフイレアを凌ぐほどだと称されるほど、多くの期待を集めている。それほど力のもった彼女がただの学生相手の楽勝な試合で攻撃を止めてしまっている。しかもその学生は見たところ攻撃らしい攻撃はしておらず、ただリナの攻撃を避け続けているだけだ。

その学生　　グウェン・イルスを知っているものは隊員の中では数人ほどしかいなかった。知っている人間もイルスのことは『魔法の使えない天才』なんて呼ばれている、劣等魔術師としての知識しか有していなかった。

しかしその学生は今、リナの連続攻撃に服を濡らす程度しか被害を受けておらず、その上何をしたのか、形勢が逆転されようとしている。

その戦いを見ていた全員がこの奇妙な光景を呆然と眺めていた。

攻撃が止んだ方をみるとリナが苦しそうな顔を見せながら、イルスを睨んでいた。顔は見るからに青くなっていて、呼吸も苦しそうに肩からしている。あきらかに病人ととれるような様子だ。

「これが……あんたの魔法……か……」リナはつぶやく。

## 無詠唱魔法 毒散

体内で毒属性化した魔法は霧のように体外へと放出され、空気と混じりいながら辺りへ散布される。その毒は口から、鼻から、相手の体内へと侵入し、免疫力を低下させ、体の自由を奪い、場合によっては永遠の眠りを与えることも可能になる。

イルスが今使っている魔法は簡単に言えば風邪のような症状を引き起こす毒である。

発汗、息切れ、悪寒、気だるさを相手に与えることができる。しかしその反面、死に至るような重症を与えることはできない。毒魔法はその性質上、相手の体内で作用するにはかなりの時間を必要とし、毒散のような空気を介した魔法は特に相手に届くまで時間がかかる。

「ふーん……相手の体調を悪くさせる魔法……病気？毒？そんなところなんでしょうね……確かにこれは誰にも見せるわけにはいかないわね。……禁断の魔法と判断されて処刑されたとしてもおかしくないわ……だけど！」

そういつてリナはいったんイルスから離れると目を閉じ呼吸を整える。そして再び目を開けると先ほどまでとは違い、顔には生気が



戻っていた。

「たしかにあんたの魔法はやかいだろうけど、それでも戦えなくなるほどではないわ！」

「くっ……」

そう、リナの言うとおり。熟練した魔術師なら魔力を体中にめぐらせることで自分の体調をコントロールすることができる。だから体調を悪くさせる程度の空気を介した魔法では相手の動きを鈍くさせることしかできず、倒すことはできない。

「……じゃあ即効性の毒魔法を叩き込んでやるよ」

イルスは右手に力をため、魔力を集中させる。目には見えないが感覚で言えば黒色の流動体のようなものが右手に集まってくる感じだ。

そのまがましい感覚は手のひらの中で毒となる。

リナの魔法攻撃によりずぶ濡れになっていた袖の感覚はもはや一切なかった。

無詠唱魔法

毒手

手に集中した魔力を毒に変換し、それを直接相手に叩き込む。相手に直接毒を叩き込むことによって、相手の体内にすばやく毒を回らせることができる。そして毒も先ほどの体調を悪くさせる程度のもではなく確実に相手を昏睡状態にさせるほどの猛毒だ。フィレアと会ったときに倒した男のように、あたれば一発で倒すことができる。

しかし、イルスが何をするか察したのか、リナは不敵な笑みを浮かべるとさらに距離をとった。

「あんたが次に何をするのかなんておおよそ見当がつくわ。その魔力をためている手に触れられるのはやばそうだからね」

そして、リナもイルスと同様に手を構えると、手に魔力をためだした。

「これ以上あんたの魔法をくらい続けるのも嫌だから、一発で決めてあげる。ちよつとだけ本気を出すよ！」

リナが魔法を放ったかのように見えた瞬間。  
イルスの視界は真っ白に染まった。

#### 無詠唱魔法の変換 氷界

リナの水属性魔法によつて辺りに出来上がっていた水溜りや水滴は、リナが今放った魔法により一瞬で氷となり、あるものは鏡のように輝く氷の塊に、あるものは一面を白く覆うような霜柱に、あるものはとがった凶器のような氷柱になった。

イルスの濡れた衣服も例外ではなく、一瞬にしてイルスは氷の塊の中にいるかのように、固まった服の中で動けなくなった。足も、地面に張り付いたかのように封じられた。

その瞬間を見逃すことなくリナは高く跳躍する。

伸ばした片手には水が集まり、氷となり、やがて大きな柱となる。

「意外にやるじゃないあんた、でもこれで最後よ」  
そういつてリナは氷でできた柱をイルスに投げつけた。

無詠唱魔法

氷柱

速度を持った柱はぐんぐんとイルスに近づいてくる。  
目の前に迫ってくる氷柱。

（あ、死んだ）

この世の最後に考える言の葉は意外とたいしたことなかった。

「それで、どうだったイルス君の力は」

フィレアは近づいてくるとリナに話しかけた。

「ふん、相手にならないね。……確かにあの力はちょっと面白い  
と思ったけど……」

リナは倒れているイルスを見下げながら言った。

「そんなこと言って、力を認めたから氷を水に変えたんだろ？」

あの時リナはとっさに氷を水に変えてイルスを助けた。今倒れているイルスはびしょ濡れにはなっているが死んではない。

「私の魔法で殺すのはもったいないって思っただけ。別にそのほかの意味はないわ」

「そうか、それではイルス君はやはり1番隊で預かることにしよう。  
彼の力は鍛えればとてつもなく強力なものになるだろう」

「ちょっと待ちなさい！誰がいらないって言った？……いいわ、2番隊にこいつを入れてあげるわ！」

「おお、そうか。ではイルス君をよろしく頼むよ」  
フィレアは嬉しそうに喋りかける。

「あんたが面白そうな顔をするのはイラつくけど……いいわ」  
そういつてリナはまた不敵な笑顔を気絶しているイルスへと向ける。

「ようこそ2番隊　通称第二特務隊へ。これからあたしがあんたを徹底的に鍛え上げているわ」

こうしてイルスの不幸な物語は始まってしまった。

#### 14・終わりの憂鬱、始まりの不幸（後書き）

これにて第1部完了です。

これから更新頻度は低くなると思いますが、最低1週間に1回は更新したいと思います。

それにしても主人公負けてばっかです。

## 小話 最近のままならないこと

目が覚めると急に気持ちが落ちてくる。

よく目覚ましがなつても起きれないというが、そんなことは俺にとっては贅沢な悩みだ。俺からしてみれば目覚ましになるまでぐっすり眠ることができなんて幸せ以上のなんでもない。

俺の目覚まし時計は俺が起きる30分後によやく音を鳴らし始める。正確に言うと、俺が目覚ましのきっかり30分前に起きてしまふのだ。

自然に目が覚めるから、寝覚めがいいとは限らない。

現に今起きたばかりの俺はもう眠くてしょうがない。だけど、眠れない。眠ってはいけないのではなくどんなに寝ようとしても眠れないのだ。けどどやっぱり眠い。

こうやってベッドの上で悪あがきをしていても無駄なことは分かっているので、さつさと起きることにする。うん、俺は眠くない。眠くなんてないんだ。今日も良い朝だ！

朝食まで少し時間があるので、少し体を動かしつつ、机に置いてあった教科書を手に取り勉強を試みる。といっても昨夜した勉強の復習程度なので部屋の中を歩きながら本を読む程度だ。

あ、今日休みじゃん。というか今長期休みの真っ只中だよ。

……習慣というものは恐ろしいもので、終業式が終わり、長期の休みに入っただのに体はいつもの時間に起きてしまふのだ。というか目覚ましもセットしなくてもいいじゃないか。何をしているんだ俺は。

ジリリリリリリリ

まぬけな俺をせせら笑うかのように目覚まし時計は音をかき鳴らした。

「お前はいつも朝早いな」

食堂に行きマリーさんに挨拶すると呆れた顔で言われた。まあ休みだというのにこんな時間に起きるのは俺くらいのものだ。

食堂といっても部屋はそんなに広くなく、せいぜい15人〜20人くらいしか座ることはできない。現在この寮に住んでるのは12人なので問題はないが。寮というよりは下宿みたいなものだ。

それよりお腹が空いた。朝食作ってくださいよマリーさん。

「まったく、みんなバラバラにおきて来るのに食事なんて作れるか、……と言いたいところだが私もお腹が空いたから一緒に作ってやる」

休みの日は各自バラバラに起きるので、各自で食事をとることになるしもちろん自分の分は自分で作らないといけなくなる。だが俺がこの時間に起きるとマリーさんは大体俺の分も料理を作ってくれて一緒に食べる。自分で料理を作ることとはできるのだがめんどくさいので、ありがたく食べさせてもらっている。

……まさか俺が起きるのを待ってるわけじゃないだろうけど、もしそれなら申し訳ないな。

そしてしばらく待つと焼いたパンと目玉焼き、サラダ、ミルクのスープが出てきた。マリーさんと向かいあつて座り。二人だけの朝食が始まった。

マリーさんは結構理論的な人で朝食はそこまで時間のかからないものしか作らない。しかしちゃんと栄養のことを考えた献立にしているし、ミルクのスープなんかはそんなに手間をかけてないはずなのに、コクがあつて美味しい。パンを浸して食べるのが俺のお気に入りだ。

「で、フィレアとは最近会っているのか？」

唐突にマリーさんはフィレア隊長のことを聞いてきた。フィレア隊長とひと悶着あつた日から、その話題は一切でいかなかったから安心していた分返答にまごついた。

「……いえ、あつてないですけど？」

これは本当。

「そうなのか？それにしては最近、毎日昼は外に出ているじゃないか」

「ああ、それはちよつと用事があつて出かけてるだけですよ」

「彼女か？」

「違います！」

女というよりは、あれは鬼だ！フィレア隊長にはあの日以降1度も会っていないが、代わりに最近俺はあの鬼のような女と毎日会っているのだ。いや、会わないといけない。まさかこんな地獄を味わうはめになるなんて！ううう……思い出しただけで涙が出そうになる。

そんな顔を見てしまったからなのかマリーさんは不思議そうな顔をする。



「ほお、クラブにでも入ったのか？」

ああ、そっちの不思議か。

「……そんなところですかねー」

あれをクラブと言うのなら名前はなんていうのだろう。日に何度も天上の世界を見るはめになるから『天使と触れ合いクラブ』とでも命名してやろうか。

「万年引きこもりのお前が毎日参加するようなクラブなんて……」  
お姉さんクラブ』とかか？」

「ちげーよ！」

っていうかクラブの意味が違っじゃねえか！怪しい方になってるよ！たしかに毎日会ってるのは年上のお姉さんだけど、あんな鬼に会ったくらいなら部屋で一生引きこもって死んでやるわ！この俺の……俺は……

俺は毎日天使に会いに逝かされてるんだああああ！

「……魔法医師に視てもらいに行くか？」

……どうやら心の中の声だったはずが最後の部分はばつちりと声に出してしまっただけらしい。

しかもそこだけ聞けば間違いなく変な意味だ。

マリーさん引いちゃってるし。

「……コホン」

ひとつ咳をはさんでみた。

「それともおまえは天使に欲情するような変態だったのか……」

何も変わらなかった。

「それで、マリーさんはフィレア……さんとは知り合いなんですか？」

とりあえずかねてからの疑問をぶつけてみた。

フィレア隊長と会った日、あの時フィレア隊長とマリーさんの間でひと騒動あった。といっても俺を連れて外へ出ようとするフィレア隊長にマリーさんが怒ったということだけだが。しかし、いきなり俺の部屋にいてそのまま下に下りてきたにもかかわらず、軽くマリーさんに話かけるフィレア隊長と、そのフィレア隊長に呆れながらも受け答え、その上フィレア隊長が俺を連れて外へ出ようとする夕食を食べていないとか門限のこととかで怒ってひきとめようとしたのだ。

これでいて知り合いではないということだったら、この二人はとんでもない人物になってしまう。……いや、とんでもないけど……

これ以上のとんでもなさなんて見せ付けてくれなくてもいい。  
そんなことをあの日からずっと疑問に思っていた俺はこの機会に  
マリーさんとフィレア隊長の関係を聞いてみることにした。決  
してこの空気を脱したかったわけではない。断じて。しかしせつか  
くの聞く機会が変な空気をごまかすためってどんな憂鬱な事態だよ  
！……なさけなくなるぜ。

「うん？まあ知り合いといえば知り合いだが、一時期私は軍にいた  
ことがあってな。そのときフィレアと一緒にの班になったことがある  
というくらいだ」

予想の斜めに行く回答だった。

いや、あのフィレア隊長と知り合うんだから、それは軍関連なのは  
分かるけど。マリーさんが一時期軍にいただって！？なんだかす  
ごい驚きだ。ってことは結構な魔術師なんじゃないかこの人？

「まあ、私はすぐ辞めて今みたいに寮の管理人をすることになった  
んだ。フィレアと話した回数はそんなにはないが今と全然変わって  
ないよ、あいつは」

「はあ……」

適当な相槌しかでなかった。だけど一つ気になるのは、そんなに  
話していないといいながらもマリーさんはフィレア隊長のことを呼  
び捨てにしている、「あいつ」とまで言っていることだ。きつとそ  
こには何かがあるような気がする。それは二人の秘密なのだろうか？

「そういえば、いつもならそろそろ出かける時間じゃないか？」

マーリさんの言葉に時計をみる。

ヤバイ！早く出発しないと遅刻してしまう！そしたら待ってるのは地獄の地獄（意味不明）だ！

「あっ！すみません！遅刻しそうなんで先に失礼します」

そういつて俺は食べかけてたサラダを急いでかきこみ、スープを飲み干した。

マーリさんはゆったりとした視線でその様子を見ながら、自分の食べ終わった食器を俺の食器の上に重ね、俺の分まで食器を片付けてくれた。

「じゃあ言わなくても分かると思うが夕食に間に合うようなら帰ってきなさい。門限は越えないように。それと……もしつらいのなら私に言ってくれば腕の良い医者に紹介してあげるよ？」

誤解は解けていなかったらしい。

解けるような対応もしてなかったけど。

しかし、時間がなかったたので俺はマーリさんの言葉を聞き流すと、玄関へと急ぎ外へと出た。

今日もまた地獄の時間が始まろうとしているのだ。

……憂鬱だー！

あまりにも嫌すぎてお腹が少し痛くなった。



## 小話 最近のままならないこと（後書き）

サイドストーリーというかあとがきというかアフターストーリーと  
いうかよくわからないですけど、つまり本編にはそこまで関係のな  
い（たぶん）補足できなやつです。

全体的にイルス君の主観的な視点で書いて見ました。

後半から主人公が暴走している気がするのは作者が暴走しているか  
らです。

気力があれば今日中に本編を更新したいなーと

それにしても本編より小話のほう分量が多いって……

## 15・訓練の始まり始まり

足に魔力をため、地面を蹴り突進。そのまま脇のそばで固めていた拳を突き出す。突進のスピードも加わり、普通の人間なら一撃で重体になってしまうほどだ。

しかし繰り出された拳は、あっさりと手で払われ軌道を変えられた。相手はそのまま懐にもぐりこむと顎にめがけて開いた手をそのまま押し出した。アッパーぎみに下から繰り出された掌底は顎に直撃し、脳を縦に揺らす。イルスはそのまま後ろへ吹っ飛び倒れた。

絶えずグワングワン響く頭の中に視界が回る。空がぐるぐる回りながら落ちてくる感覚にイルスはこれ以上は闘えないことを感じたが、相手はそんなことを気にしてくれるような人ではない、すぐさまわき腹に強烈な蹴りを入れた。

「ぐはっ！」

言葉にならない音が口から吐き出される。一瞬にして口の中に生臭い匂いと血の味が充満し、腹のそこから何かが湧き出す感覚に痛みと気持ち悪さが混ざり合う。もう自分の体がどんな体勢をしているのかすらわからない。

相手は近づくと頭体問わず無差別に踏みつける。何度も何度も何度も踏み続け、体が傷だらけになったところで、ようやくとどめとばかりに頭をぐりぐりと踏みつけた。

「まだまだ教育が足りないみたいね」

その女性      リナはニタニタ笑いながらそう言ったのだが、落ちかけていたイルスにはもはや届いていなかった。

その後3度こんなやり取りをしたところで、昼食休憩となった。そのたびにイルスは殴られ、蹴られ、傷だらけになり、失神した。リナはイルスが失神しても攻撃の手を休めず、イルスが気がつくとまたすぐに闘いをはじめた。

この闘い 訓練はイルスが2番隊に入った次の日から始まった。学校が休みに入ってるので一日中訓練があるのだが、その内容は朝早くから晩までリナと魔法を使わず肉弾戦をし続けるというただそれだけの訓練（訓練というか、もはやただのいじめだが）だ。さすがに隊長だけあってリナは魔法を使わなくても強く体術に少しは自信のあったイルスだが、すぐにコテンパンにされた。それでも魔法で怪我を治すとすぐに訓練が再開されるので、倒されては回復させられ、回復させられては倒されての繰り返しだった。

「だいぶボコボコの面になったじゃない」リナはニヤニヤしながら喋る。

（やったのはあんただよ！）

そうは思うのだが言ってしまうと午後のしごきが一段と激しくなるだけなので、イルスは何も言わずにご飯を食べる。本当はそんなに食欲はないのだが、残すとリナがうるさいのだ、「しっかり食べないと強くない」というリナは自分の分と一緒にイルスの分の弁当まで作って、イルスに食べるように強要するのだ。しかも量は半端ないほど多い。しかしリナはその半分をペロリと食べるのだから、そのそのスリムな体のどこにそんなものが入るのだろうとイルスは不思議になる。

やっぱり胸なのか

イルスがそう思いながらリナの（主に胸元を）見てると、リナはイルスのことを気にせずに話を続けた。



「何度も言ってるけど、あんたの魔法は特殊な属性なんだからまずは体術のほうを上達させないといけないの。わかる？ 最低でも私と同じレベルにはならないと使い物にならないんだから」

そういつて肉を挟んだパンを手に取り、口に運ぶ。上品だがここが豪快さのある食べ方だ。

リナの言うことは分らないでもないが、最低でもリナと同じくらい体術が強くないといけないといわれても、イルスは困ってしまう。なんたってリナは隊長なのだ、女性だからといっても体術は普通の兵士よりは上なはずだ。

ちなみに、魔力で体の機能を補えるので基本的に男女の体力の差はさほどない。あるのは骨格と体格、筋肉の差くらいだがイルスとリナの身長はイルスが若干高いくらいで体格もほぼ同じくらいだ。

「体術で必要なのは、相手の動きを読むことと自分の体を上手に効率よくコントロールすること。相手の動きを読むには相手の魔力の動きに気をつけることになるし、自分の体をコントロールするには、体のどこにどれだけ魔力を込めればいいかを知る必要があるわ。つまり理論的には体術を上手にコントロールできる人は、魔力も上手くコントロールできるようになるってことよ。そして体術を上達させるには誰かと戦うのが一番手っ取り早い。だからこうして私があんたと戦っているわけ」

リナはすらすらとこの訓練の意味について唱えた。それは分るが闘っているときのリナの顔はまるで悪魔のようだとイルスは心の中でつぶやいた。

それが口から出てしまっていたのか、リナはイルスを睨むと、イルスの弁当を取り上げると入っていた果物を全部平らげた。弁当をイルスに戻すとき「午後は気を失っても殴り続ける……」とつぶやいていたがイルスは恐怖から聞かなかったことにした。

「とにかく当分の間あんたはあたしと1日中訓練よ。あたしと体術で互角、もしくはあたしを倒せるくらいになるまで他のことはしないで良いから。早くあたしを倒さないと魔法の訓練を始める前に学校が始まっちゃうわよ」

「魔法の訓練も平行して行うことはできないんですか？」

思わずイルスは口をだした。こんなしごきが休みの間中繰り広げられるなんて冗談じゃない。

「ダメね。言っただでしょ。体術をマスターすることは、魔力を上手にコントロールできるようになる基本なの。それをマスターしないうちから魔法の練習をしたってあんたには意味無いわ」

リナは即座に答えた。

「それにあんたも気づいているでしょ？自分の魔法の『弱点』くらい。まずは魔力のコントロールの仕方をマスターして、それから自分の弱点をどう補っていくかについて考えていくの。いい？」

## 15 訓練の始まり始まり（後書き）

昨日のうちに書き上げる予定でしたがこの時間までかかってしまいました。

1日になんども更新している人はすごい。

## 16・魔術師の欠点（前書き）

これから魔法用語のわけかたについて

魔力：魔法を使うための力MPみたいなもの

魔法：魔力を変換したもの（無詠唱魔法の意味）

魔術：魔法による攻撃方法（毒手、氷柱、水弾などにわけようと思います。

なるべく分かりやすいように整理していきます。  
それまでの分は近々再編集すると思います。

## 16・魔術師の欠点

前にフィレアに指摘されていたことだが訓練に入ったときにリナにも散々指摘されている。

毒魔法の弱点について。

まず、相手の魔法を防御することができない。

「普通相手の無詠唱魔法を防ぐには、避けるか自分の無詠唱魔法をぶつけて相殺するしかないわ。まあ属性による相性があるから完璧に防ぐことは不可能かもしれないけど中には自分で防御のための魔法を編み出している人もいるし、防ぐことはできなくても避ける時間を作ることとはできるわ。けどあんたの魔法属性は基本的に毒を垂れ流すことしかできないから敵の魔法攻撃を防ぐことはできない。言ってしまうえば全ての属性と相性が悪いみたいなものよ。必然あんたは敵の攻撃を避けるしかできない」

敵の攻撃を避けるのは結構有効な手段である。このほうが魔力をあまり消費しなくてすむ。しかしそれはあくまで攻撃を避ける手段の1つとしての場合である。様々な手段から「避ける」という行動

を選ぶから、有効なのであって、避けるしかできないとなると話は別だ。

まず避けてばかりいれば、相手に行動を読まれてしまうし、反撃をすることができない。また攻撃範囲の広い魔法など、どうしても避けることができない攻撃がきた場合、そこで行動は詰んでしまい、負けが決定してしまう。

次に、訓練をすることが難しい。

「これは致命的なところよ。魔法の訓練で一番重要なことは実践してみることもだけど、あんたの場合自分の魔法の効果を試すためには犠牲になる人間が必要ってことだからね。いつとくけどあたしは練習台にならないからね」

無詠唱魔法の訓練は通常実践訓練でしか上達することはない。思考式が個人によって違うため、書籍化テキストできない上に、人に教えることもできない。

無詠唱魔法は自分で何度も試しながら、技を深めていくことしかできないのである。

なので、まず自分でいろいろな技を思いつき、それを対戦形式の訓練等で試していつて、技に磨きをかけていく。

しかし、イルスの場合は技を思いついたとしても試す方法がない。毒魔法の長所は相手の調子を落としたりする軽いものから、死に至る重いもの、また眠りを誘うような様々な体調異状をもたらす毒を作り出すことができるところにあるのだが、魔法を試せないところんな危険な毒ができるかわからず使うことはできない。そのうえその危険性は訓練でも同じため、訓練で人に使うこともできないのだ。

「私からしたら今あんたが使っている毒魔法だつてよく使えるようになったわと言いたところだわ」

リナは呆れたように言う。

現在イルスが使いこなすことができる毒魔法の種類は、頭痛やめまいといった風邪のような症状を起こす毒と、直接相手に毒を入れることで、相手を昏睡状態にさせる毒の2種類しかない。これは子どもの時に自分が体験した症状をもとに作り出したものなので、試す相手が必要としなかった。

「まあでもこの2つは魔力のコントロールを上手く使えるようになるれば、まだ対策を講じることができるから良いわ。問題はその魔法があんた自身に与える欠点よ」

リナは続けて言う。

「あんた、自分が作り出した『毒』ってあんた自身もくらってるでしょ？」

そう、最後の決定的な欠点は、自分で作り出した毒は自分にも影響を与えてしまうということだ。

自分の魔法は普通自分に影響を与えることはないのだが、イルス

の場合はなぜか自分にも毒と同じ症状がでることがある。もちろん相手に与えた毒の症状よりも軽いのだが、作り出した毒の症状が重く、危険であるほど、自分に訪れる症状（副作用といってもいいかもしれない）も危険になる。

これはイルスが自分の魔法を使いたくない理由の1つでもある。

「毒」を生み出す際、自分の頭にはどす黒い感覚が流れ、一瞬胃から全てが逆流しそうな気持ち悪さに支配される。そしてその後一定時間は頭のズキズキした痛みが止まらなくなる。

軽度の毒でさえこのような副作用があるのだからもっと重い毒になるとどうなるかわからない。

「今思い出してみれば、あたしと戦ったときも途中から動きが遅くなってたわね。あの時は余裕を見せるために体だけで避けてたのかと思ってイラっとしたけど、よく考えればその副作用が原因なのね」

「しかし、あんたが入隊したのはいいけど、使い物になるには前途多難な道だねー」

リナが吐き出すように言う。しかしその目はイキイキとしていて、まるで新しいおもちゃでも見つけたかのようだ。

イルスは作ってくれた弁当を食べながら恐怖を感じる。

最近の地獄のような訓練で、イルスは大体リナの性格を分かってしまった。

「とりあえず午後からはまた体術の訓練をするから」



つまり、また午後からイルスをしごくということだ。

（この人……ドSだ！）

イルスはこの後また続くであろうししごきに自然と食べるペースが遅くなった。

「あと、今度の作戦にあんたも参加してもらっからね」  
「ぶっ！」

軽く言ったりナの重大発言にイルスは口を含めた食べ物を噴出した。

もちろんその後のしごきはいつも以上の過酷さであった。

## 16・魔術師の欠点（後書き）

説明回です。

お気に入り登録してくれる方がいてありがとうございます。

増えれば増えるほど更新スピードが速くなるかもしれないか（たぶんありません）

今年中にあと1回か2回更新できればと思います。

あと宣伝ですが、他の作品「下の下は真っ平で」更新しました。ぜひ読んでみてください。

あと今から短編を一つ書くことと思っています（今日中に書けるかも？）

まったく関係ない話ばかりですみません。

## 17・something corporate

クラリエット城のすぐ側にあるクラリエット王国軍施設。

王国軍施設内は宿舎、訓練場、研究室、会議室の4つの施設から構成される。

まず宿舎はその名の通り、兵士が住むところだ。しかし王国軍にいる兵士全員が住んでいるというわけではなく、ある程度の地位のある人や特殊な家柄の人は違う場所に住む許可を得ている。イルスも例外の1つだ。

次に訓練場と研究室は兵士が自らを鍛えるために使う施設だ。訓練場では日夜兵士が魔法訓練や体術訓練、編成の練習などをしていて、研究室では新たな魔法理論を追求している。以前にイルスがりナと闘ったのもこの訓練場の1つだ。

会議室は任務に就く兵士へ任務内容を確認したり、もし戦争が起った場合にはどこに陣地を置くか、どこにどれだけ兵士を配置するかといったことを決めるために使われる。他の施設は兵士であれば誰でも使うことができるが、この施設は他の施設と違い、隊長クラスの人の許可がない限り使うことはできない。また、会議室はどの部屋も魔法が施されており、定められた人以外は入ることも見ることも聞き耳を立てることもできない。情報が漏れないように徹底的に管理される。

その会議室がある施設の一画に2番隊の会議室もある。

「よう新入り、隊長のしごきにもう辞めたくなっただんじゃないか？」

イルスが会議室に入ると、すでに中にいた人に話しかけられた。2番隊の会議室は小さな小屋くらいの広さで、大きな机とそれを囲むように椅子が置いてある。10人前後がようやくは入れるくらいの広さだ。

「いえ、辞めた後のほうが怖そうなんでまだ続けますよ」

イルスはそう言い返すと、話しかけた男の横に1つ席をあけて座った。

話しかけてきた男はアメリオ・シークという2番隊の隊員の1人だ。髪は黒く短く、少し白髪も入っていて、いつも無精ひげを生やしている。イルスとは年齢が一回り以上離れていて、外見もイルスからすればおっさんである。どこか陽気な感じを醸し出しており、イルスが2番隊に配属されて始めて紹介されたときも、このように気軽に話しかけてきてくれた。

少しうつとおしい気もするが、どこか憎めない人だ。

「おっ、新人りなかなか言うじゃねえか。そう思わないかい、フィーネ」

シークは対面にいた女性に話をふる。

「……」

シークの話しかけに無言でいる女性はジャーミール・フィーネという。まっすぐでさらさらした水色の髪でガラスのような瞳をしており、遠くから見れば、人形のように綺麗だ。先ほどの会話でもそうだが、表情を変えることなく、またあまり口数も多くないので本当にマネキンか何かではないかと思ってしまう。当然イルスはフィーネとまだ一言も話したことがない。

「まったく、せめて頷くぐらいしてくれよ」

「……」

シークに対しても反応しないのは同じらしい。基本的にフィーネ

はりナ隊長以外に反応することはない。

イルスが2番隊で面識があるのは今のところ、この2人とリナだけだった。2番隊にはあと2人所属兵士がいるのだが、その2人は長期任務中でここにはいないらしい。

任務中の2人とイルスを含めて2番隊は総勢6人となる。

現在、王国軍にいる兵士は5千人を超えていて、隊の数は11部隊ある。ほとんどの兵士はまず11番隊に所属されることになる。そして実践成績や魔法属性、性格などを考慮に入れて一桁の番号の部隊に配属される。それ故、隊の中で一番数が多いのは11番隊となるのだが、11番隊は部隊として明確に独立しているわけではなく、有事の際や作戦で人が足りなかつたりする場合、他の部隊に組み込まれることになる。

6～9番隊はいわゆる通常の部隊で、戦争などでは中核をなす部隊である。人数は部隊によって違うが100人から多いところでは1000人にまでなる。

5番より小さい数の部隊は、王国軍の中でもエリートクラスとなる。扱う作戦も、国家関係を揺るがすものにまでなるし、戦争の際では他の部隊をまとめ、指揮をする立場になる。どの部隊も50人もいれば多いほうである。

そんな数ある部隊の中でイルスの所属する2番隊は特に人数が少なく、イルスを含めても6人しかない。ある意味、超エリート部隊といわれる1番隊よりも入ることが難しいとされる。

もつともその理由の大半は任務内容と隊長の悪趣味なしごきにあるのだが、入ったばかりのイルスにはまったく知らされていないことであった。

そういったことを含めて、イルスが2番隊に入隊したことはかな

り異例のことで、その事情をしらされているのは王国軍の中でも一桁の部隊に入る人間だけであつた。

「みんなそろつてるわね」

ボタンと大きくドアを開けると、リナはすぐさま椅子にすわり、皆を見回した。その目はいつものしごきでの若干ふざけた様子はまったく無く、真剣そのものだつた。

「じゃあ、今から第2特務隊の任務内容を話します」

## 17・something corporate（後書き）

まったく意味のないタイトルですみません。ある海外のバンドの名前です（良いタイトル思いついたら変えるかも）

本当はもう少し書く予定でしたがここで切らないと切りどころが見当たらなくなるので切りました。

あと今回キャラが増えました。次回以降活躍予定です。

お暇でしたら評価のほうお願いします

## 18・初めてのおつかい編

クラリエット王国の王城から少し外れた所にあるシュニー口商会。商会といってもそこまで大きなものではなく、扱う品物も日常生活品が主で取引先も王国内の宿屋や商店が中心で、たまに小貴族が取引先になれば良いくらいだ。

しかし、そんなどこにでもあるような商会だったシュニー口商会の周りで、最近おかしい噂が流れてきている。他国の人の出入りが多くなっているという話だ。

商会を開いている以上、人の交流は激しいはずだし、国交がある以上他国から人が来ることはそこまでめずらしくない。しかし急に人数が多くなると話は別だ。なんらかの国を揺るがすような事件が起きる可能性がある。そういった事件を事前に防ぐために動くのも王国軍の仕事の一つである。

「特にこういった怪しい場所や人、物を調査したり排除したりすることは内密に行なわれる。誰が敵か分からない上に、下手にばれて国同士の問題に発展すると最悪戦争になったりするからな。そしてこの調査や潜入などの隠密行動といった特殊な任務を行なうのがこの2番隊の主な任務の1つだ。だから2番隊のことを第2特務隊と俺たちは呼ぶんだ」シークはそういうとコップを傾けた。

場所は王城から少し離れたところにある酒場。ちょうどシュニー口商会の目と鼻の先にある。

「いや、まだ作戦行動前なんだからお酒は飲まないでくださいよ、シークさん」



「何いつてるんだ。飲んでるフリだよ。フリ！」

「……すっかり空になってますよそれ」

「何だよー細かいことは気にすんなよイルス君。君も飲もうじゃないか！」

「俺は未成年です！」

「ったくうるさいわねあんたら！もうすぐ作戦を始めるんだからおとなしくしてなさい！」

話は会議室に戻る。

「今回の任務はシェロー二商会へ潜入、調査を行ないます。もし、何らかの国家を揺るがすような事態が起きている場合はその規模を確認し報告、または私達で直接殲滅をします」

リナはそういうと全員を見回した。初対面の時や訓練のときとは違い、その顔は緊張感にあふれ、隊長にふさわしいものであった。

「シークは私とともに潜入、商会内へ入った後はいったん別行動をとり、あたしが商会の主であるシェニー口氏の部屋へ潜入するからその間、その他の各部屋を調査してちょうだい。その後あたしと合流し、報告。殲滅すべきかどうかはあたしが決めるわ」

「了解リナちゃん」

シークは気軽い感じで返事をする。ちなみにシークは2番隊の副隊長であるらしく、リナが隊長になる前も副隊長だったらしい。

「……隊長と呼びなさいと言ってるでしょ。フィーネは商会の隣にある倉庫を視察。その後私と合流して、一緒にシェニー口氏の部屋へ潜入。いいわね」

「了解しました」

ちなみにこの会話が本日フィーネの唯一の言葉である。

「そして最後にイルス」

リナがイルスのほうを見た。

イルスの最初の任務が発表される。

「イルス、あんたは……」

外で見回りをしている人間を眠らせて、その後外で待つてなさい」

「えっ？」

イルスは驚いてリナを見返した。

「ようするにあんたの任務は見張りよ、見張り！」

イルスの初任務は見張り役となった。

「じゃあそろそろ任務を始めるわよ」

リナはそういうとテーブルにおいてあった布で口を拭き、席を立ち上がった。それを合図にするかのようにシーク、フィーネ、遅れてイルスも立ち上がる。

店を出ると十字路になっており、その対角上に目的地がある。商會はここの辺では比較的に立派な門構えをしていて、建物もそれなりに大きい。そして門の前には男が1人見張りとして立っていた。

「じゃあ、シーク、フィーネはいいわね。イルスはその見張りを眠らせてきなさい」

そういわれ、イルス是对角線上をまっすぐと目的地へむけ進む。最初見張りはこちらに気づいていなかったのか、ボーっと立っていたがこちらに気づくとイルスの顔をしばらく眺めていた。

「何か用か？」

見張りはイルスのことを客か何かと思ったらしく。少し眠気を感じて声で話しかけてきた。

「あの、ちょっと聞きたいことがあるんですけど……」イルスはそういつて男に近づくと、みぞおちへ向けて一気に突きをくりだした。

「うぐっ！」

男は小さな悲鳴をあげると地面に倒れ、動かなくなった。しばらくして隊長達がゆっくりとこちらへ近づく。

「じゃあ、少し行ってくるわ」シークがそう話しかけると、3人は商会の中へ入っていった。

イルスは1人、見張りの男が起き上がらないように気をつけながら、壁によせ、商会に近づくものがないか、辺りを見回した。

「よし、帰るぞ」

ふいに後ろから肩を叩かれ、振り向くとシークがいつもの軽い感じで声をかけてきた。続けてリナ、フィーネも出てきて、イルスたちは先ほどいた酒場に戻ることにした。

この時点でイルスの初任務が終了した。

## 18・初めてのおつかい編（後書き）

しばらく間隔があいてすみません。年始から風邪をひいて寝込んでました。

初任務が無事？あっけなく終了です。最初は意外にこんな感じですよね。

あとさつき確認したらリナとフィーネの外見の表現がほとんど同じだったのでリナの方を変えました。確認しといてください。（同じになってしまったのは理由があるのですが、そのままにしておくややこしくて分かりにくいので）

あと、アクセス数が2万を超えててびっくりしました。

そんなにもこの小説へ来ていただいて感謝感謝です。

これからも何とか継続していきますので、感想や評価がありましたら書いてみてください。

今年もよろしくお願いします。

## 19・初めての打ち上げ編

「どうだった？初めての任務は？」シークはそういうと、先ほどとまったく同じようにコップを傾けた。

場所は先ほどまでいた酒場。シュニー口商会での潜入任務が終わった後、すぐにイルスたち第2特務隊は酒場に戻ってきた。残っていた食べ物がまだ生暖かいところを見ると、実際にシュニー口商会に潜入していたのは小一時間ほどだったのだろう。

そしてそのまま任務遂行の打ち上げとイルスの入隊を記念しての会を行なうことになったのだ。

正確には任務自体はまだ終わってなく、報告書をまとめたりしないといけないのだが、そこは後日に回そうというシークの主張にリナ隊長があっさりと承諾し、打ち上げが行なわれることになった。

「どうだったかなんて聞かれても、結局見張りくらいしかしてないから正直なところ感想なんてまったくくないですよ」

イルスが行なったのは見張りの人間を眠らせたことと、リナ達が侵入してから商会の前で見張りをしていたくらいだ。その見張りだってそんなに長いこと潜入していたわけではないから軽く立っている間に任務が終わったような感覚だ。

「まあ最初の任務なんてそんなもんだ。俺なんか最初の任務は軍施設にいる馬の点検だったからな。臭くって臭くって、ついつい息をしなかったらいつの間にか気絶してたぜ」

最後の言葉はもちろん冗談だろう。基本的にシークは軽々しく話

だしたら止まらなくなるタイプの人間だ。その後も軍に入ってから  
の苦労話を聞いてもいないのにどんどん話してくれた。およそ半分  
くらいは冗談も入っているのだろうが、施設内の清掃員をさせられ  
たり、厨房に回されたりしたという話が本当なら、シークは根っか  
らのエリートではないのかもしれない。

「それにあんたはまだ自分の魔法を上手くコントロールできないん  
だから、中につれてつても意味無いでしょ。作戦に参加させてあげ  
ただけでもあたしに感謝するべきよ」

リナもコップの中身を飲み干すと、会話に参加した。作戦が終わ  
ったからなのか、リナもお酒を飲んでいる。ちなみにもう6回ほど  
酒のおかわりを頼んでいる。とてもハイペースだ。

「だったら別に無理に作戦に参加させなくてもコントロールできる  
ようになってからでも良かったんじゃない……」

「それじゃあいつまでたつてもあんたを实践で使えないでしょ！こ  
んなに簡単で新人の研修に丁度良いような潜入任務なんてめったに  
無いんだから！」

と言つて再度、コップに注がれていたお酒を飲み干す。練習の時  
は容赦など一切しないのに、意外と新人研修にはちゃんと考えてい  
るらしい。

「とはいっても最近の特務隊の任務は今日と同じでハズレが多いん  
だけだな」

「シーク！あんたはそんなこと言わなくていいの！」

結果からいうとシュニー口商会に危惧するような事件はなかった  
らしい。リナとシークの話によると潜入しているいろんな部屋を調べ  
たが、何も怪しいものは出ず、出入りがあるという他国の人間の情  
報も調べたが、分かったのはその人間も他国にある小さな商会の人  
間ということで、どうやらその商会との間で優先的なやり取りを行  
なう計画で、ゆくゆくは共同で商売をするという計画もあるらしい。



他国の商会と一緒に商売をするという事はめったにないどころか、この国ではまったく無かったことなので、噂が立ち、それにどんどん悪い影が重なっていったらしい。

「ハズレでよかったじゃない！事件なんて無いほうが良いに決まってるでしょ！もし本当にシエニー口商会が何か悪いこと企んで他国の人間を引き入れてたら、最悪戦争なんて事にもなりかねないのよ？」

と、リナはお酒で赤く染まった顔で言う。もう数えるのも面倒なので数えていなかったが、あれから5回以上は女性の店員さんがこのテーブルと厨房を忙しそうに行ったり来たりしていた気がする。

「なに言ってるんだ。戦争になったらなっただでお前は張り切ってるんだろ？リナちゃん」

シークが茶化すように言うと、リナはさっきまでのしかめっ面を一転、赤いままの頬を緩ませ、にやけた顔になった。完全に出来上がっている。

「当たり前よ！フッフ……敵なんてバツバツなぎ倒してやるわ。私と対等に闘えるやつなんてフィレアくらいのものだわ」

そんなことを言っているとろんとした目をテーブルに移しコップを握る姿はどこか可愛らしく色っぽい。

というか、仮にもシエニー口商会の目と鼻の先にある、こんな酒場で堂々と潜入捜査の話や戦争の話をしてもいいのだろうか？イルスはそっと辺りを見回したが、こちらに注意を払っているような人間は見当たらなかった。もともとイルスは見張りしかしていないし、シエニー口商会の情報も一切知らないのかもしれないとしても見つけようもない。せいぜい店員さんがコップが空くのを見計らっているくらいである。店員さん目とが合ってしまい、思わずペコリと会釈

をした。店員さんのほうも微笑みながら会釈を返した。

「とにかく、イルス。あんたのためにしばらくはこういった小さな任務をしていくから。2番隊の任務がどういったものなのかをしっかりと見ておきなさい」

リナは隊長つぼくそういうと、とても美味しそうにお酒を飲み干した。

飲んだ後はぷはあゝとおっさんのようにコップを置いた。

日付が変わる時間が近づき、酒場は少しずつ人が減ってきた。

その間もリナは酒を飲み続け、シークはいろいろなことを話し、フィーネは我関せずといった様子で黙々と食べ物をお口に運ぶ。

イルスはシークとリナの話に付き合いながらも若干の気まずい思いを感じていた。ちなみに寮を出るときに軍の仕事で遅くなるとマリーに伝えてあり、しぶしぶ納得してもらった。(そのかわり休日の買出しに付き合わされることになったのだが、普段からちよくちよく手伝っているので罰としてはたいしたこと無かった)

突然フィーネが立ち上がった。

「それでは私は帰ります」

「ええーフィーネもう帰っちゃうの？」

「はい、隊長。私は明日も仕事がありますので」

「ああーそっかあーじゃあ、気をつけて帰りなさい。報告書は今週中ならいつでも良いから」

「了解しました。では失礼します」

そういつとフィーネは扉まで一直線に、一度も振り返ることなく帰っていった。結局イルスとはまだ一度も会話をしていなかった。

「じゃあ俺も帰るかな」

「シーク、あんたは私に付き合いなさい！まだ全然飲めるでしょ？」

「無理だつて。俺だつてあした仕事があるし」

「あんたの仕事なんてたいしたことないじゃない。酒飲んでたつてできるでしょ？」

「無茶なことというな。そんなに飲みたいなら新入り君に付き合つてもらえ」

シークはそういつてイルスのほうを親指で指した。リナはシークからイルスに視線を移すと、次にイルスのコップに目を移した。

「あんたお酒飲んでないじゃない！あんたの歓迎会も含めてるんだから飲みなさいよ！」

「い、いや。俺まだ未成年ですし……お酒飲んだことないし……」

「いいから飲みなさい！これは命令よ！じゃないとあんたの訓練をこれからもつと過酷にするわよ！」

これ以上どこをどういう風に過酷にしようというのだろう。イルスが黙っているとリナは自分のコップをイルスの口に押し付けてくる。

「さあ飲みなさい！……そうだ、店員さん！おかわり……ああもう面倒だからあと10杯くらいもってきてちょうだい！」

リナはいったんコップをテーブルに置くと店員さんを呼び、酒と食べ物をいろいろ注文していった。その間にシークは席を立つとイルスの横にきて口をイルスの耳に近づけた。

「あいつはものすごい絡み上戸だから気をつけろ。……じゃあ幸運を祈る」

そういつとそそくさと店の扉へ向かい、帰っていった。状況が読めず困惑しているイルスを尻目にリナは注文を終え、こちらに振り向いた。

「あれ？ シーク帰っちゃったの？ まあいいや……じゃあイルス、今日はとことん飲むわよ！」

リナは飛び切りの笑顔を見せるとコップのふちをイルスの口に押し付けた。

## 19・初めての打ち上げ編（後書き）

少し時間が空いてしまってますみません。

よく考えたらリナも未成年じゃないかというツッコミは無しでお願いします。

前書いたものを確認せずに書いていつてるのでどんどんボロが目立つようになってきました。（主人公の1人称がぜんぜん定まっていし）

ここらへんか2章が終わってからくらいに、1度ちゃんと書き直しようと思います。

次話は来週くらいに書ければ書き上げます。

それにしてもリナのおとなしい設定はどこへいつてしまったのか…

…

## 20・初めての（前書き）

この話では未成年が飲酒をする場面が描かれていますが、現実では未成年の飲酒は法律で禁止されています。マネをしないでください。

この小説の世界では未成年が飲酒をしてはいけないという法律は定められてないけど倫理的に子どもはお酒を飲むべきではないという慣習が広まっています（という設定にしときます）

## 20・初めての

一口目を口に含むとフルーツの香りが口いっぱいに広がり渡り、ちよつとした酸味と苦味がまた下を刺激する。喉にゆっくりと熱いものが流れ、胃の中に染み渡る。初めてだったけれど不思議と不快感はない。

二口目を喉に流し込むと心地良さが胸に広がり、体はぽかぽかと暖かくなり、自然と口は緩み、少し自分が陽気な気分になったことを実感する。

三口目、四口目とコップの中身を飲み干すと、もう頭は難しいことを考えるのを放棄し、視界の周りはクラクラと動きまわり、耳はいろんな音を立体的に拾いだす。

2杯、3杯、4杯、5杯……コップが空になるたびにまぶたは重くなり、変な浮遊感が体を支配してくる。頭は重くなってきた首を手で支えていないと前を向くこともできず、顔は今にも机に迫るかのように上下運動を繰り返す。

そんな状態の中、かろうじて思い出せる最後の光景は、正面で楽しそうにしている隊長の可愛い笑顔だった。

今まで、イルスはいろんな危険な状況や最悪の事態に陥ったことがある。彼の場合、生まれてすぐに自己の生命の危険があったし、そこを逃れた後も彼の不幸は終わることは無く、年を重ね、成長を続けるたびに、彼の出生や呪われた魔法、能力は彼を苦しめることはしても助けることはほとんど無かった。

別に彼の運命が不幸だけしかないというわけではない。生を受けるということはそれだけで幸福なことだし、最近で言えばフィレアに見つけられ、スカウトされたことも、もしかしたら幸福なことなのかもしれない。また2番隊に入ったことも、リナとであったことも、今はなんともいえないが運が良かったといえるべきことになるのかもしれない。

所詮、人間は与えられた状況に対応するしかなく、そのことが幸福か不幸かなどと言う事はそのときには分からないものであるし、もしかしたらそれが分かる時といったものは無いのかもしれない。

そういつた生まれたときからいろいろな状況を経験してきたイルスであったが、次の日に起きた状況は今までとまったく異なり、さらに幸福か不幸かなどまったく分かるものではないものだった。



「……うあっ！」

目を開けたら突然びっくりした。

自分でも意味が分からないがイルスが体験したことはまさにその言葉通りのことだった。

心地良いわけではないが決して苦しいわけでもない眠りから起こされ、しばらく我慢しつつようやくまぶたを開くと、外の光とともにぼんやりとした輪郭が現れ、覚醒とともににはつきりと映し出されていく。

リナ隊長の寝顔だった。

あわてて起きようとするが起き上がれない。

それもそのはずでイルスの体はリナの手足によってきっちりとホールドされている。しかもあるうことかりナを見る限り、上は下着以外は何も羽織っておらず、毛布でよく見えないがおそらく下も同じなのだろう。

前日の自分の記憶をたどってみるが、憶えているのはシークが帰ったところまでで、そのあとは断片的に、会計をしたところとか、リナ隊長をおんぶしたとことかくらいだ。内装を見たところ自分の部屋では無いようなのでリナの部屋なのだろう。

とにかくこの状況がヤバイことだけは確かなので、イルスはリナを起こさないようにそつと抜け出そうと試みたところ、脱出は不可能なことが分かったが、何とか上半身を起こすことはできた。服を着ているところを見ると、昨日リナを部屋へ運んだ後、自分も寝てしまったようだ。

することが無かったので部屋の中を見回してみる。

リナの部屋はイルスが思っていた以上に生活感のあふれる、いわゆる「女の子」の部屋であった。全体に明るい色のものを取り揃えてあり、カーテンはフリフリでピンクで、いろいろな雑貨に囲まれていて、女の子の人形や動物のぬいぐるみなんかがあったりして。

しかし、さらに生活感を示すものは、床に投げ捨てられた大量の服であった。

とにかく汚い。

いや汚いというか雑々としている。

よくみると部屋の隅々にホコリがたまっていて、ここ最近掃除された形跡はまったくといっていいほどない。机の上には会議の書類やちよつとみた感じでは分からない本が無造作に積まれてあり、今にも倒れそうになっている。1回倒れたのか、机の周りには書類が散らばっていて中には破れているものもある。

イルスはなんだか女の子の実態を知って何故か幻滅してしまったような気分になってしまった。リナの部屋は本だけしかなく、汚くしようもないほど整然としているイルスの部屋とはまったく違った。しかしあの鬼のような隊長が人形を持っているといった女の子っぽい趣味を持っていたり、「新月の魔術師」と言われるまでの人が、初対面から感情全快でその上部屋はこんなに汚くなるほど乱雑な性格なのかと考えるとなんだか面白くもあった。

「……ん」

声がして、あわててリナのほうを見ると一瞬険しい表情をしたあと、瞼をゆっくりと開いた。緑色の綺麗な瞳が現れ、こちらを向く。

「…………おはよう」

「おはよう……………」ざいます」

しばらくリナはイルスの顔をまじまじと視たあと、急に上半身だけ起き上がった。その反動で、リナにかかっていた毛布が落ちる。

「うわぁ！」

もちろん先ほど言ったようにリナは下着しか付けてない。イルスは驚いて目をそらした。

「うん？」

「ちよつ、隊長とにかく上を着てください」

イルスのその言葉にリナはようやく下を見て自分の姿を確認した。しかし、リナはあわてることなくそのまま立ち上がるとゆっくりと背伸びをした。イルスの目の前にはリナの綺麗な身体が映し出された。リナは机に置いてあった水入れを取ると、それをコップにいれ一気に飲むとまたベッドに戻り毛布をかぶる。

「今日のアンドの訓練は午後からだったわよね？」

毛布から声がしたかと思うと、リナが毛布から顔だけをだしてイルスにたずねてきた。

「へっ？あ、はい」

「じゃあ、私はまだ寝るから。あんどもここで寝ていいから昼に

なっ たら 起こしなさい」

それだけ言うつりナはまたすやすやと寝息を立て始めたのだった。

## 20・初めての（後書き）

時間がかかってすみません。

実は今回の話は書くべきかどうか迷ってました。

まず未成年が酒を飲むことです。が前書きに書いたとおり、ちょっと苦しいですがそういう設定にすることにします。

次にリナとイルスのシーンですが、これは書かなくても良かったのですが何かハプニングみたいなのがあってもいいかなという気持ちで書きました。

作者としては初めての任務で初めての事尽くしに戸惑う主人公と意外にあっさりした初任務とそれ以外のところでもっとドタバタしてしまう展開を考えていたのですがなかなか上手く描けません。

当然、酒を飲んだことをマリーさんに知られればこっぴどく怒られます。

## 21・大人って怖い

午後からの訓練は何事も無かったかのように行なわれた。

いたって普通の地獄のような訓練だった。

「視認が遅い！ちゃんと目にも魔力を込めて相手の魔力の状況を精確に確認しなさい」

そういつてリナは突きをイルスの顔面にくりだす。イルスは何とか攻撃に反応するものの、完璧に避けることはできず頬を吹き飛ばされる。

「避けるか防ぐか瞬時に判断できるようになるのも強さの一つよ？敵の攻撃によつてはかするだけで致命的になるものだってあるんだから！」

例えば自分の魔法がまさにそういった種類ではあるのだが、いざ戦闘になると確かに自分の判断がまだ甘いことに気づかされる。

目に魔力をためることによつて、視力を高め、より遠くのものを見ることができ。さらに相手の魔力の流れを感知することもできるようになる。体術の基本はより相手の攻撃を見極めることができるかにあり、そのため視認を怠ることはできない。

今日の訓練は防御訓練で、イルスは主にリナの攻撃を避け、防ぐことに重点が置かれている。これはイルスが体術で防御を苦手としていることもあるが、ある程度イルスがリナの動きについてこれるようにしたのでさらに体術を上達させるためでもある。

たしかにここ最近のイルスはリナの攻撃を防ぐこともよくあり、

有効打ではないもののリナを脅かすような攻撃もできるようになってはきた。元々学校では魔法を使うことができなかったイルスは体術を専門に闘ってきたし、何より技を吸収するのが早い。その結果徐々にはあるがイルスとリナの闘いは拮抗するようになってきた。今もかすつてはいるが徐々にリナの攻撃を避けることができるようになってきた。

「なかなかやるようになったじゃない」

リナはそう言いながら攻撃をする手を休めない。イルスは傷だらけになりながらも何とか避けつつ答えた。

「そうやられてばかりられませんよ！」

「そう！……ならこれならどう？」

急に重心を低くたかと思うと、そのままイルスに突っ込んだ。意表をつく攻撃にイルスは反応することすらできず倒れこむ。リナもそのまま倒れこみ、リナがイルスに抱きつくような状態で、二人は動けなくなった。

今日の朝と同じような状況だ。

今朝イルスが味わった柔らかな感触がよみがえる。

「……何急に動けなくなってるのよ」

リナはイルスの胸につけてた顔をあげるとイルスの顔をじつと睨んだ。

「……えーっと、そのー」

何も答えられない。そんな気まずさがイルスの中を駆け巡る。リナはお構いなく、イルスの上をよじ登り馬乗りになる。マウントポジションだ。

「とりあえずよく分からないけど、なんかむかつくこと考えてそうだから今日の訓練はこの攻撃で終わりにしてあげる。せいぜい頑張って防御しなさいよ！」

そういつてリナは拳を振り上げた。

「痛っ！……ってて」

訓練が終わり控え室で1人イルスは着替えている。リナはこれから別の仕事があるらしくすぐに帰っていった。

「それにしても、あそこまで殴ることはないだろ。顔の原型がなくなるかと思った」

基本的に訓練での怪我はすぐに治癒符や治癒魔法によって治すことができる。しかし傷は治せても傷を受けたときの痛みは治せないため、「痛い」という記憶はしばらく残ってしまう。

マウントポジションからのリナの攻撃は熾烈なもので、最後のほうはイルスの顔はもう殴る部分など無いほどに腫れ上がっていた。イルスも最初はいくらか防御できていたのだがやはり体勢の不利には勝てず、殴られるままになった。

顔を殴られた記憶がずきずきと痛む。

（それに結局昨日のことを聞けなかった）

訓練の間、正確に言えばリナの部屋にいた時から聞けるチャンスはいくらでもあったのだが結局イルスは何も聞くことはできなかった。リナといえばそれがなんでもなかったかのように、まるでいつ



ものことかのように普段どおりに接してきたし、気にしている素振りも無かった。

（昨日の夜、俺は何かしてしまったのか）

あるいは何もしなかったのか。リナはどう思っているのか、また何かしていたのなら憶えているのか。

記憶を呼び起こすことができないという初めての経験にイルスはどうしていいのかわからず、結局気まずさを拭い去ることはできなかった。

残っているのは柔らかな記憶と痛みの記憶だけだった。

「誰かいるのか？」

言葉と共に戸が開き、幾人かの軍人が入ってきた。イルスより少し年上のように見える、比較的若い人達のような。通常1から10番隊の人間には隊を示すバッジを付けることになっているが、その隊を示すバッジを身に着けていないところを見ると11番隊の人間か、まだ入ったばかりの新米軍人なのかもしれない。

イルスも新米であることに代わりが無いが、イルスの胸には2番隊にすることを示すバッジ（なぜかピンクで花の形）がついている。

「おい、ここはガキの入っていない場所じゃないだろ！」

先頭で入ってきた男が少し大きな声で注意をする。

「いえ、その違いまして俺は……」

イルスはあわてて訂正しようとするが自分のことをどう説明すればいいのかわからない。そもそも説明しても信じてもらえるかわからないのだ。

そこへ後から入ってきた軍人がイルスのことに気づいたのか、先頭の軍人に話しかける。

「違うつてロペオ、あいつは2番隊に入ってたつて奴だろ」

「ああーあれが噂のやつか」

そういつて二人はイルスをもう一度みる。イルスは何かわからずとりあえず会釈を試みたがロペオと呼ばれたほうはただ見ているだけで、もう1人のほうは少しだけ頭を下げた。部屋のとにいた人達も中へはいつてきてイルスの周りを囲むように立つ。

「ねえどうしたのこの子？」

中に入ってきた一人が尋ねる。

「あれだ、今度2番隊に入ったつていう噂のガキだよ」

今度はロペオがこたえる。

「へえーこれがあの噂の」

「特務隊にスカウトされたつていう子どもか」

どうやらイルスのことはかなり噂になっているらしく、皆が興味津々といった目でイルスを捉える。しかもどうやらイルスは2番隊にスカウトされたということになっている。甚だしく誤解であるが、訂正するのもどうかと思いつつイルスは何も答えないでいると、先ほどロペオと呼ばれていた軍人がイルスのほうへ近づいた。

「よう天才君」

ロペオは嫌みったらしさたつぷりの口調で言った。

「若いのにすごいねーいきなり2番隊からスカウトうけて、いきなり訓練生も11番隊も10番隊もすつ飛ばしてもう2番隊だもんな

「こりや将来は王国軍の元帥にでもなっちゃうんじゃないの？それとも特務隊なんかより1番隊に入りたかったかと思っちゃってるのかな？天才君は？」

いきなりの悪意全開の言葉にイルスだけでなくまわりも驚く、あわて先ほどロペオと一緒に入ってきた軍人がロペオとイルスの間に入る。

「おい、やめろよロペオ！急にどうしたんだ」

「とめるなよルイ！だってム力つくじゃねえかこんなの！俺たちが散々訓練してやっと王国軍に入ったっていうのに、こいつはいきなりスカウトされて入ってるんだぜ！しかもスカウトの理由を聞いたかよ！」

「おい！それは今こいつに嫌味をかける理由にはならんだろ。それに所詮噂は噂だ、本当かどうかも分からないことでいちいちム力つくな」

ルイと呼ばれた軍人はロペオを落ち着かせるように話しかける。ロペオも冷静になったのか黙ってそっぽを向く。

「すまん、悪気は無いとはいえないが怒らないでやってくれ」

ルイはイルスの方を向くとイルスに謝罪した。もともとこういった悪意には慣れっこであるイルスは特に怒ってもいなかったがこの場をすぐに立ち去ることにした。

「いえ、では失礼します」

そういつて誰の顔も見ようとせずに部屋を出て行く。こんな人達を相手にしていてもきりが無いとでもいうように。

「ふん、お飾り隊長のしたで軍人ごっこでもやってろ」

後ろでロペオの声がした。その後でルイがロペオをたしなめる声がしたが、イルスは聞かなかったことにして戸をしめた。今日はこの後は何もないから寮に戻り、マリーに昨日帰らなかったことを謝らないといけない。

（お飾り？なんのことだろう）

ロペオの言葉の中でその単語だけが何故か気になった。

## 21・大人って怖い（後書き）

1ヶ月以上放置してしまつてすみません。

忙しくて更新が遅れがちなんですが続けていきます。

あとこれからこういったことは活動報告に書いていくようにしたい  
と思います。

小話的なことも書いていくので興味のある方は読んでみてください。  
（各話のサイドストーリーとか、メタなものとかを予定、巻末4コマ的なものになるかな？）

新しいキャラが出ましたが、これから出てくるのかな？

基本名前を出したら活躍させてあげたいのですが、どうなるかはまだ未定です。

## 22・作戦と仕事と飾りの人形に噂は

標的が静かに移動をしている。

しばらく移動すると標的の目の前に奇妙な匂いを放つ袋が現れた。何なのかはわからない、それでも見過ごすことのできない魅力を持った匂いだ。ずっとその袋を見つめるが動く気配はない。それなら近づいてみるべきだろうか、そろそろと少しずつ近づいては立ち止まり、袋を確認。また近づく。

袋まであと少しとなったときもう一度立ち止まる。

周囲を確認、まわりには何も危険がない。

もう一度袋を見つめる。あいかわらず魅力的な匂いを放つ袋の中には何が入っているのか。興味で一刻も早く触りたいが、我慢を重ね見つめ続ける。袋は依然動く気配はない。覚悟を決めそっと近づく。

不意に強烈な衝撃

地面から光があふれ、自分の足が何かによってがっちりと掴まれたことを感じる。あわてて逃げようともがくが何がなにやら分からぬ今、落ち着くこともできずに体中を思案無く全力で暴れさせるのみだ。

もがこうと動かす視界の端に人間が現れてこちらに向けて手を振

りかざした。

「これでよしと。はあーそれにしてもあんたの魔方陣は便利ねー」

リナはそういうと先ほどまで標的であつたものを見つめている。標的は大きな熊のような生き物でグレイデッドという種族だ。大きさは熊の2倍から3倍で基本的に自分の縄張りから出ることは無く、人を襲うことはないが、時々なんらかの拍子で人里に出てくると、人間にとって脅威となってしまう。

「確かに、正確で書くスピードも早い。というかこんな魔方陣俺は描けねーわ」

シークも興味深そうにイルスが描いた魔方陣を見る。魔方陣自体はもう役目を終えてただの円陣となっている。その上にはさっきまで必死にもがいていたグレイデッドが人形のように動かないでたっている。

氷づけにされているのだ。

今回の任務は魔獣退治であつた。人里近くに接近したグレイデッドを捉え、駆除するという本来なら訓練兵や備兵達が行なうような

任務である。

最初の任務を終え、その後も2、3回同じような任務を行なったあと違った任務も行なった方が良さだろうということで、タイミングよくでてきたグレイデッドの退治任務を行なうことになった。

今回はリナ、イルス、シークの3人で任務を行い、イルスがグレイデッドを足止めするために罠を設置、そこにリナがとどめを刺すという作戦だった。シークは万が一のための補助と活動の記録のために同伴した。

イルスはまず適度な地形で捕縛用の魔方陣を設置しその上にグレイデッドの好物である果物の匂いにする袋を設置した。比較的簡単な罠であるがグレイデッドほどの大きな魔獣を捕獲するための魔方陣は普通ならかなり作るのに時間がかかる。しかしイルスは造作もなくスピーディーにこの魔方陣を描いた。

「いやいや、魔方陣なんて描き方さえ憶えれば誰だって使えるじゃないですか」

前にも説明したとおり、魔方陣などを使う構成魔法は魔法の構成の仕方、構成式さえ覚えていれば極端に魔力が少ないものでないかぎり誰だって使える。この場合は捕獲用の魔方陣の描き方を知っていれば誰だってグレイデッドくらい捕獲できるということだ。

「おいおい、冗談言うなよ」

しかし、シークはその言葉を否定した。

「構成式を憶えるのがどれくらい難しいか知ってるのか？一般の兵士でさえ使いこなせる構成魔法は10にも満たない。それにスピードもお前ほど速く魔方陣を構築できるやつなんていないだろう」

確かに魔方陣などの構成魔法を数多く使いこなせるようになるのは難しく、時間がかかる。現在イルスが覚えている構成式は500を超え、実際に使いこなせる構成魔法はと聞かれたら1000く



らしいかないだろう。しかしそれでも普通の人に比べたら圧倒的に多く、スピードも普通の人が1つの構成魔法を構築する間にイルスは3つ4つ構築することが可能だ。

しかしそれは、普通の人は構成魔法に頼らなくても、無詠唱魔法を使えばいいから。

「何言ってるの、構成魔法でも使えるのなら覚えておいたほうがいいに決まってるでしょ」

イルスの考えは、しかしリナの言葉によって否定された。

「確かに無詠唱魔法のほうが素早くできて尚且つある程度までなら誰だって簡単に使えるようになるけど、それでもたかが一属性の魔法にだけ頼るなんて気がふれるとしか思えないわ」

どの属性にも例外があるが相性というものがある。例えば大体の火属性の魔法は大体の水属性の魔法に弱いといった具合である。「大体」といつてるのには火属性の魔法の中にも個人差でいろいろな種類があるからである。

「魔方阵は描くだけでも正確さが必要とされる。ちよつと歪んだりただだけで効果範囲や威力が違ってくるからね。その上どれだけ魔力を込めるかにも繊細さが必要とされるわ。あんたみたいにここまで素早く正確精密に魔方阵を構築することなんてそれこそ血の滲むような努力をしないとできないわ」

リナはそうまくし立てた。内容はイルスの努力を称えているような感じだが、早口で言われてると普段から貶されてしかいなかった。なので、イルスにはそれがほめているようにはまったく感じられなかった。

「ちなみに上級魔法はいくつ使えるんだ？」

シークが再びイルスに話しかける。

「上級魔法は30個くらいですかね、全属性に対してまんべんなく使えるようにしてます。あと最上級魔法も一属性に対して1個から2個は憶えてます」

イルスがそう答えると、シークもリナも驚き、シークは口笛をふきリナは呆れたような笑みを浮かべた。

ちなみに構成魔法にはそれぞれ下級、中級、上級、最上級という区別の仕方があり、構成式の複雑さ、魔法の効果と威力によって区別される。グレイデッドを捕縛した魔方阵は大きなものではあるが、構成魔法としては下級の魔法ということになる。

「あんたは誰にでもできると思ってるでしょうけど上級魔法を30も使いこなせる人間なんてめったにいないわ、ましてや最上級魔法をいくつも使える人間なんて王国軍の隊長クラスでもいるかどうか……たしかに構成魔法は対一なら役にたたないかも知れない。けどね」

そしてリナはにやりと笑った。

「あんたのその能力、集団での活動なら必ず役に立つわ」

それはリナにとって初めてイルスを認めた瞬間だったのかもしれない。

このままグレイデッドを放置しておくのもどうかということでも、氷付けになつてるけど生きている（遠くの森まで運び、そこで開放するということになった。

「じゃあ、あたしがやってくるから二人はもう帰っていいわ。シークは報告を忘れずに。イルスは明日も訓練だから遅刻しないように」

そういつてリナはグレイデッドの側によると、移動用の魔方陣が描かれた紙を取り出し、そのままどこかへ行ってしまった。

「さて、じゃあ俺たちも帰るか」

そういつてシークは先に歩きだした

「シークさん！」

イルスはシークの後ろ姿に向かって呼びかけると、止まったシークの後を追ひ横に並んだ。

「帰ったら聞きたいことがあるんですけど」

「ああ、その噂か」

シークは軽く言つと、少しコーヒを飲んだ。そして葉巻を口に咥えて煙をゆっくり吐き出す。

場所は2番隊の会議室。特別にシークがあけてくれたのだ。

「確かに一般兵の中でかなりイルス君の噂が流れてるな。君がスカウトされたのは軍の『マスコット』的存在にするためだという噂がね」

（はあ？）

「マスコット……ですか？」

たまらずイルスはそう聞き返した。

### 23・気になったことは素直に聞くと良い

「ああ、マスコットだ」

シークはなんの感慨もなくそう言った。

マスコットとは要するに宣伝材料ということなのだろうか。何を宣伝するのだろうか、またなぜその宣伝材料にイルスが選ばれたのだろうか。

「簡単に言ってしまうえば若い奴を軍にスカウトすることで軍内部の活性化を図ろうということだろう。しかもいきなり1桁の隊員になっちまったんだ、若い奴は俺にもチャンスがあるかもしれないといっそう切磋琢磨するだろう」

確かにいきなりわけのわからん学生が急にエリートコースといわれる2番隊に所属するようになるのだ。その噂には羨望と嫉妬、疑惑が混じっているのだろう。

「まあ噂は噂だ、お前が2番隊に所属したことにそんな理由はない。あの隊長を見れば分かるだろう？」

シークはにやりと笑う。

リナはむしろそんなことを許さないだろう。イルスが入隊することには一番反対したのもリナである。しかし噂とはいえ、されてみるほうにしてはたまったものじゃない。しかもやっぱり自分がスカウトされた理由がわからない。実力でいえばイルスより上（魔術実技の順位）の人はいくらでもいるし、なによりイルスの学年にはエクトという天才がいるのだ。どう考えてもそちらをスカウトするほうが先だ。

「そこはやっぱ理由付けが曖昧だな。主力な説はまずイルスの魔法のできない落ちこぼれをスカウトして次にエクトをスカウトする予定だとか、他にはエクトのほうからまだ早いと断られて、仕方なく次に有名な学力1位のイルスをスカウトしたとか。まあ奴らにとつて理由なんかはなんだっていいんだろ、ようはイルス君がスカウトされたことを自分のプライドが傷つかない範囲で定義づけしたいのさ」

シークが面白そうだなと付け加える。

「こっちはまったく面白くないですよ、余計な敵視が増えるだけだし」

「だがいい噂もあるんだぜ、一般兵の女の子の間では『若くてかわいい』とか『守ってあげたい』とかモテモテだぜ?」

律儀に女の子の声を真似して身振り手振りで伝えてくる。キモい。「黒髪で黒目という純粋な黒尽くしの男って結構レアだから。夜道は気をつけるよ」

葉巻を咥えながら言う顔が、冗談だとわかってても一瞬イルスを身震いさせる。女つてのは怖いものだということをイルスはクラリエツト王国に来て散々経験しているからだ。……主にマリーさんとカフレア隊長とカリナ隊長だ。

「というかシークさんはなんでそんなに噂を知ってるんですか!」

「おいおいこう見えても特務隊の副隊長だぜ。だてに女を泣かせてはいないさ」

前半も後半もまったく答えとして意味をなしていなかったが。イルスはあえて何も聞かなかったことにした。

「そういえば、じゃあ『お飾り隊長』って言葉、聞いたことありますか？」

「お飾り隊長？なんだそりや、7番隊のことか？」

シークから予想外の答えが返ってきた。そのことも聞いてみたいがとりあえず先日起きたロペオとのことを説明する。

「うーん……うちの隊長がお飾り隊長ね！……聞いたこと無いな、というか普通あいつにそんなこと怖くて言えないぞ」

シークは少し難しそうな顔をして顎を撫でる。ジヨリジヨリと音がしそうなほどシークのひげは硬い。確かに普段からリナ隊長の怖さを充分とっていいほど知っているイルスならそんなことは死んでも言いたくない。それ故に気になったのである。

「ロペオっていうのは何番隊の奴だった？」

イルスが隊を示すバッジを付けてなかったことを言うと「隊章を付けてないということは11番隊か」とひとりごちて考えを続ける。しばらくうんうんうなった後一つの結論に達したのか、いまいち納得しない顔でつぶやいた。

「もしかしたらそうだった噂が起きてもおかしくはないのか……」

「え？」

あわててイルスが聞き返すとシークはイルスに気づき、頭を掻きながら話した。

「たぶん、そいつらが言ってた『お飾り隊長』っていうのは2番隊のもう一つの主な任務のことだな」

「もう一つの『主な任務』……ですか？」

「ああ、特務隊には諜報活動といった任務のほかにもう一つ軸となる仕事があるんだ」

まあ任務といえるかどうかは微妙なところだがな、とシークは付

け加えた。

「どんな仕事なんですか？」

イルスはおそろおそろ聞いてみる。あんな噂が出回るのだ。そんなに良い仕事ではないのだろう。またそれ以上にお飾りと言われるような仕事を思いつかないというのもある。

シークはそんなイルスの表情を見ながら顔を曇らせ、しばらく何も話せなかった。普段の陽気な彼からは感じられないような、静かな目がその場にいたイルスを捉え、辺りは静かに時間が過ぎる。やがてシークは葉巻を吸い終えると吸殻を捨て、静かに口を開いた。

「そうだな、どんな仕事かは実際に体験してみろ。今度その仕事があるから、俺がリナに話しておこう」

「あまり口外できないような仕事なんですか？」

するまでは秘密ということだろうか。

「いや、俺が言うよりリナに説明してもらったほうが良いだろうと思ったただけだ。あと俺は怖くて言えないから『お飾り隊長』のことはおまえから隊長に言ってみてくれ」

「ええ！？」

気になったばかりに憂鬱な仕事が増えてしまったイルスであった。



23・気になったことは素直に聞くと良い（後書き）

ちょっと短いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9735o/>

---

憂鬱な魔術師

2011年4月10日21時57分発行